

950.4
Y87a
⑤

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



950.4
Y87a



佛蘭西文藝印象記

吉
江
喬
松
著

大正
12.5.16
内交

文藝の歴史は常に舊きものを破り捨て、新たなるものを目醒ましめ、立たしめ、現はれしむる人間性の伸展の歴史である。

従つて文藝に現はるゝ人間性の戦ひは、根本的、本質的の必勝を期し、従來、機會なくして表現を持ち得ざりし多數者をして、次第に當然の要求表白を持たしむのである。この表白が時と共に自由に、時と共に力強くなつて行く。燎原の火の如く遮るものを焼きつくさずばやまない。

この新生命は、大地を源泉とし、無限の信力を持つ。我々は常にこの生命の伸ぶ可き機會と、環境とを拓き、造らねばならぬ。更に我々はこの新生命を通じて、醜くして頑ななるものを

焼き亡ぼさねばならぬ。これが廣き意味に於ける當代の文藝の使命である。

大正十二年五月五日

吉 江 喬 松

目 次

南 國

(三)

古代の遺跡——南國の空——アヴィニヨンの法王廳——タラスコンとロオヌ河——アルルの古代劇場——アルルの女——ミストラルの都——ロマの文明——ニイムの夕暮——クウルベの「邂逅」——十字架像

(三〇)

地 中 海

美學者ギュイヨオの晩年——アンテイ岬の家——地中海——嵐の日——ミシュレの「海」——海岸の避難者——海上の堡塞——パゼエヌとカイヨオ——ニイス——モナコ公國——モンテ・カルロ

(六二)

ヴ エ ル サ イ ユ

藝術と時代の表現——歴史の歩道——統一集注より分散解放へ——ルイ

目 次

王の統御と疲勞と寂寞——ヴェルサイユよりトリアノンへ——トリアノンより田園生活へ——更に群集の中へ——藝術の正當の所有者

ポオル・ロワイヤル訪問記

(一九三)

若葉の森——ベルジックの詩人——パスカルとラシイヌ——パスカルの生涯——「瞑想録」——彼の宗教——ラシイヌの少年時とポオル・ロワイヤルの教育法——彼の詩情——「ポオル・ロワイヤル概史」

夏 休 み

(一九四)

温泉地——ラ・ドランスの谿谷——避暑地の一家族——二人の音楽者——村寺の鐘の音——モン・ブランの姿——傳説の角笛

アナトオル・フランス

(一九五)

彼の容貌と彼の談話、講演——彼の少年時——セエヌ河岸——詩人ヴィニ

秋

(一九六)

イ——純理、唯美、懷疑時代——「シルヴェストル・ボナルの罪」——「文學評論」——「赤い百合」——「エビキュールの園」——心理開展期——「現代歴史物語」——考古より現世批判へ——圖書堆裡より街頭へ——「白石上にて」——彼とロマン・ロラン

霧の都リヨン——シャヴァンヌの「秋」——シャヴァンヌとモロオ——宗教情緒——スタンダルの故郷——アルプの秋——ベルリオズとスタンダル——自然美と僧院生活——フォンテンブロオの森——森林と自由、原始の生

大地の聲——シャルル・ルイ・フィリップ

(一九七)

文藝の二特質——農人と文藝——フィリップの生立ち——貧窮生活——民衆より立つ作家——彼の性行——彼の援助者——リュシアン・ジャン——

彼の作物——「ペルドリ爺」——「マリイ・ドナデュ」——「シャルル・ブラン
シャル」

新史劇論

(二五)

ルイ・バストウル百年祭——科學者の使命——「バストウルの生涯」——
サシャ・ギトリイの「バストウル劇」——新しき史劇——民衆詩人ベラン
ジエ——ギトリイの「ベランジエ劇」

ポオル・クロオデルの劇作

(二七九)

ペギイとクロオデル——「靈と水」——クロオデルの青年期——改宗心理
——信仰の進展——劇作の並行——「マリイへの告知」——愛と母性——
「人質」——「ル・ベエル・ユミリエ」——共存の眞義——散文詩集「東明」

民衆劇運動

(三〇三)

民衆劇運動の二様式——ミシュレの民衆劇運動——民衆祭——民衆劇の
要求條件——民衆劇に近き作物——モオリス・ポトシエ氏——彼の民衆劇
——「悪魔の酒賣り」——彼の作物

フロオベエルの現實主義

(三一四)

フロオベエルの百年祭——時代を表現する文藝の二傾向——科學的精神
と藝術的想像力——歴史——「サラ　ボオ」——「聖アントワヌの誘惑」
——ノルマンの特質——「ボヴァリイ夫人」と「情緒教育」——フロオベエルの
態度

瑞西の自然美

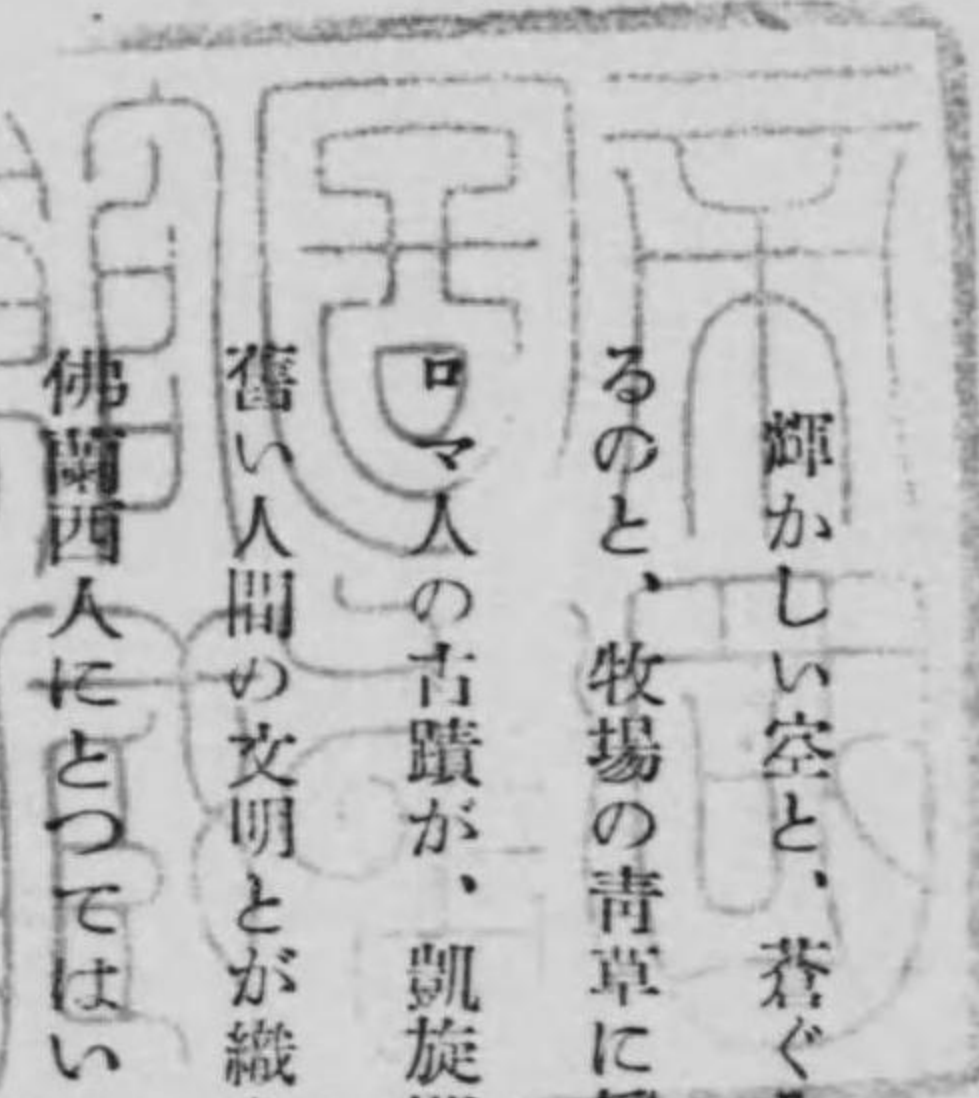
(三四五)

ジュウブ——ピトエフ夫人——モン・プラン——レエマン湖——青光の廣
茫——シヨンの城——「シヨンの囚人」——モントルウ——山間の小村——
——ベルヌの都——アルプ連峰——ユング・フラウ——頂上の美

佛蘭西文藝印象記

吉江喬松著

南^ニ 國^{アイ}



輝かしい空と、蒼々しい橄欖の林と、砂塵の立つ眞白な路と、麥の穂波の風にゆる
るのと、牧場の青草に眞赤なコクリコの果しなくまじりつゞいてゐるのと、その中に
ローマ人の古蹟が、凱旋門が、古水道が、圓形劇場が、到る處に散在して、若い自然と、
舊い人間の文明とが織り出して來る南國の光景は、霧と小雨との中に冬を送る北方の
佛蘭西人にとつてはいつも憧れの對象となつてゐるのである。

南^ニ 國^{アイ}
ローマ人の古蹟は佛蘭西アルプ地方の小都會にも、中央佛蘭西にも、ロアル地方に
も、また巴里そのものの中にすら見出される。けれどこれ等の地方では、他種の生活の
色彩の中にそれ等の古蹟は没せられて、或はゴディックの寺院に、或は自然の偉大な光

景に、或は封建の城塞に、或は近代式建築物に壓せられて、現在の一般生活の背景を形成する際立つた主要な役目は演じてゐない。

南國に於てのみは、それが人々の日常生活を、氣分を、性質をも支配する大切な仕事をしてゐる。此處では羅馬の都市そのものに於けるよりは、より好く保存せられてゐる圓形劇場——ニイムに於ける如き——を見ることが出来る。法王廳——アヴィニヨンに於ける如き——すら見られる。傳説と歴史とが結び付いて人々の想像力を養ひ、その想像力が生んだ作物を演ずる舞臺を、これらの古蹟が提供する。さらに南國の日の光の中に、長い眠りをむさぼつてゐた人々の魂が、思ひも寄らぬ土壤に不思議な花の咲き出すやうに、時々目を醒ましては、周囲を見まはして、今更の驚きに、聲を立て、歌ひだすのである。

若し人が、コルネイユに、フロベエルに、モオパッサンに、レアリストの態度と、ロマ

ンテイクの夢との結合を求めて、ノルマンの系統をたどり得るとするならば、更にシ
 オトブリアンに、エルネト・ルナンに、さらに現代の批評家、アンドレ・エ・シュアレスに、異
 教的の美とクリスト教的情緒の融合を基本として、ブルトンの血を求めんとするなら
 ば、南國を代表する人々として、ギゾオを、オウギュスト・コントを、さらにブルユヌ
 テイエルを擧げて見るが好い。如何に彼等の中に統一的、支配的即ち羅馬人のもつてゐ
 た統御的勢力が生きて動いてゐるかを知るであらう。

北方人の個人本位なるに比べて、彼等はいつも綜合的である。一つは實證的、歸納
 的、他は演繹的、包括的、一つは分離的、遠心的、他は融合的、中央集權的である。

「ヴィエンヌを過ぐると空が一變する。光りある空、南國の空、それが君の頭の上を照
 らし出す」。ヴィクトル・ユゴが河船でロオヌを下つて、南國の旅に出た頃は、おそら

くその空の變化が今日汽車で南下するよりは一層この詩人の胸にはつきりした印象を刻んだことであらう。彼がアヴィニョンの法王廳の蹟を訪づれたとき、それは南國の秋であつた。夕日と、秋と、アヴィニョンとが三つの調和ある姿、レを見せてゐた。華かな入日がロオヌ河の水の面を照らし、その水上に架つてゐる不思議な傳説の斷橋をかすめて、樹々の茂つた小高い丘の半面から、歴史そのものゝ亡靈のやうな法王廳の壁の上に冷たい澄んだ最後の光を投げかけてゐた時であつた。

私達の行つた時は、若葉の薫りが空中に漂ひはじめて、四月の太陽が既にその南國獨特な目を射る烈しい光線を白い路の上に照り返してゐた。十四世紀の中葉、凡そ七十年間法王の住地であつたアヴィニョンは、その當時、アルホンヌ・ド・オデの小物語の中に現はるゝやうな光景を呈してゐた。ロオヌに架けた橋の上には、事あることに人々が集つて踊つた。“Sur le Pont d'Avignon, tout le monde dance” (アヴィニョンの橋

7
の上で、何人でも踊る) 今でも、また何處でゝも、何か事あるごとに、人々の浮れさわぐとき、何の意味もなしに、人はこんな事を言つて騒ぐ、それほど當時のアヴィニョンは賑かたものであつた。

法王廳の後方の丘にはマロニエの樹々がもはや、赤い花、白い花を蠟燭のやうに若葉のこんもりした中に燃やしてゐた。その下をゆつたりと流れてゐるロオヌは蒼くく淀んで、光ある空をその胸に寫し、舊時からそのままになつてゐる斷橋を流れの中央まで渡してゐた。

馬が嘶き、驢馬が鈴の音を響かせ、多くの鐘樓からつき出す鐘の音は、五月の空に颯る燕の姿のあとを追ひ、薫香が流れ、黒い僧服が階段を埋め、彌撒を誦する聖僧の聲は街路にまでも漂ひ、合唱の歌、緋衣の番僧ベネディクトが突き鳴らす金杖の響、中世紀のアヴィニョンは、賑やかな響きと樂の音と聖經と舞踏と、即ち宗教の慰安と、歡樂の表現と

が調和せられた小都市であつた。此處では法王もヴァティカンの宮殿に於けるよりはより多く氣樂で、即ちより多く人間的で、更に言ひかへればより多く佛蘭西的であつた。此處では驢馬を鐘樓まで追ひ上げる惡戯者も居たらう、更にその驢馬が空中から引き卸ろさるゝ奇觀もあつたであらう。この惡戯者が法王に近よつて、扈從にあげらるる自由さもあつたであらう。この自由と、機智と、惡戯と、快調とこそは、いつもゴオル人のもつ精神上の特色である。

そして、中世紀の何處にも見らるゝ如く、併しこの都市には特に、宗教と實生活との混合、會堂は歡喜の場處であり、日曜日は休息と共に快樂の日であつた姿が、より好く見えてゐたのであつた。

8

當時のロオヌ河は上流のリヨンへ溯るにも、また地中海へ下るにも、大切な交通の要路であつた。今日、眠るが如く丘の麓に横はつてゐるこの河には、當時、多くの船

9

が輻輳して、この河岸にも賑やかな生活があつた。

南國の詩人ミストラルが *Falrigie* の運動を起す第一の動機に接したのも、このアヴィニオンに於てであつた。彼が青年期をこのアヴィニオンで、デュビュイの家の寄宿生として送つてゐた時、或る日曜日の午後の禮拜に參してゐたとき、彼はその合唱の聲をいかにも重苦しく感じた。不圖、彼は「懺悔の讚歌」を、自國プロヴァンスの韻文に譯したらばと思ひついた。早速それを試みた。南國の土壤の中に眠つてゐた人々の靈が、いまや、彼が口の中で譯しつゝ歌ひだすプロヴァンスの韻文の音聲をかりて、初めて適當な表現の口を見出した如く、自在に、またなめらかに、調子よく、流れ出たのであつた。彼は我ながら愕いた。そして元氣づけられた。

10

彼のこの目醒めを更に勵ましてたのは、このフェリブリイジュの運動(南方語、南方文學復活運動)の「創始者であり、第一の魂である」といはるゝジョゼフ・ルウマニユであ

つた。この人の獎勵は決定的に南國の魂を、南國の詩、南國の語を、ミストラルの中に呼びさまし、それと同時に、彼の周圍へ、未來の運動者、七人の群れを、持ち來たしたのであつた。

近代に於ける南方文學復活の搖籃の地は、かくして中世紀に於て最も華かであつた都市の一つアヴィニオンであつた。

奇怪なグロテスクな怪物ラ・タラスクにその名を負うてゐるタラスコンは、ロオヌ河がその最大の偉觀を呈してゐる下流の岸に、いかにも暑さうな南國的光景の中に、眠るがやうに横はつてゐた。恐らく、この怪物タラスクこそは、上古のゴオルそのものゝ活動の具體的表現であらう。これを征服したサント・マルトこそは、クリスト教の力を代表的に示してゐるのである。今日でもなほ、このタラスクの祭が時々行はるゝので

も興味がある。あの針鼠のやうな大きな怪物、見掛けは鈍さうな、重さうな、まるまつたやうな形をしてゐて、或時に不圖、敏捷に動き出し、縦横に飛び廻はらずにはゐない、醜いやうでどこか滑稽な、重苦しいやうで何となく愛嬌のある、柔かさと同さとなが一緒になつてやゐるうな外觀、これがゴオロワそのものゝ姿ではなからうか。

さらにドオデのタルラン・ドゥタラスコンに到つては、古代のゴルオ型の人物、野性と、冒險と、機智と、悪戯と、鈍重と、敏捷と、誇張と、細心とを同時に示した、併しそれ等がいづれも自然の實現であるが故に憎氣の持てない、一種の愛嬌のある親しみ易い氣質を、それと同じ氣質の作家によつて示されたものである。これ等の本質が、長い年月を経て、様々な教養を受けた今日でもなほ、一般佛蘭西人の生活の中に、またその表現たる文藝のなかに、何處かに生きてゐるといふことを、何人が否定し得るであらう。

私達が、アルルの古代劇場の廢墟の石に腰を卸ろしてゐたのは、千九百十八年の四月中旬の日曜日の朝であつた。爽かな風が光ある空から落ちて、石疊の間に茂つて白い花をつけてゐる小草の葉先きを揺かし、寺々より打ち出だすアンジュリュウスの鐘の音が、大空の空氣をどよもして、その晋波の中を、幾百となき燕の群が、輕快に身をひるがへして飛んでゐた時であつた。

廢墟のなかには、何處でもさうだが、不思議に人の心を取しづめる力がある。私達は腰をおろしたまゝ、黙つて、石の圓柱の風雨にさらされて立つてゐるのや、幾階も積み上げてある石の階段や、その奥へと通ずる迫持の小門をながめてゐた。

明るい、なごやかな南國の空は、この廢墟の石に懸掛けた二人の小さな東方の旅人の姿を、明らかに照らし出して、その影を下なる石疊の上に寫してゐた。

此處には何もない。たゞ古代の匂ひと、明るい日光と、その中を、希臘、羅馬或はサラザン式の型をまじへた美しいアルルの女たちが、胸に寶石の珠飾をして、黒い天鵝絨をつけたリボンの頭飾りして、彌撒の席へと急いで行くのが見られる。古しながらの静けさと、平和とが行き互つてゐる。

私達が脱れ出て來た北の方、巴里の空には、この時もなほ、北から來る長距離砲の砲弾が爆裂し、白晝の都大路に、家屋の倒潰、煙塵の奔騰、四方に逃げまはる人々の叫び、悲惨な光景が演じ出されてゐることであらう。

此處とはあまり異つた對稱である。いづれが眞實の生活であらう。自分等がいま靜かにちつとして、この平和な古代の空氣の中にひたつて、明るい日を十分に浴びて、二つの小さな黒い彫刻物かなにかのやうに、肩をそばめ、身を寄せ合はせてゐるのが果して、眞の姿であらうか。

草の伸びた石段の間を、一頭の山羊が、その草の芽を噛みながら、のそ／＼歩き、時々頭を昂げて鳴聲を立てゝゐた。一緒にゐたO君の眼は靜かにそれに注がれてゐた。たしか、アサア・シモンヅは「秋の都」として、落葉に埋れた秋雨のわびしいアルルの都を書いてゐたと思ふ。ドオデの「アルレジエンヌ」はアルルの女を、ビゼエの音楽と共に不朽化した作物である。ビゼエのこの劇作への間挿樂は、グノオの「ミレエイユ」の曲と共に南國を思はせる忘れがたき名曲である。

グノオは巴里からわざ／＼ミストラルを訪ねて、この詩人の「ミレエイユ」に作曲をするためにサン・レミイに止つてゐた。而してあの曲が出来上つた時、彼はこのアルルの古代劇場で初めての試演をしたのであつた。

14
アルルはまさしく、ミストラルの都である。彼の住居はマイヤヌの村にあれど、彼の力が生きて動いてゐるのはアルルである。彼の立像、彼の博物館は、この舊き歴

史の市に新らしい記念をつけ加へた。

舊くから幾多の巡禮者が、この舊い都へ憧れの旅をしたことであらう。圓形劇場も、數多き寺院も、ロマ人の墓も、舊い僧院も、暑い日に焼かれ、風雨と戦つて、二千年近くも経過してはゐれど、依然としておなじ容をとどめてゐる。

時と自然と人間の力とが溶け合ひ、同じ歩みを合はせ、過去と現在と、夢と現實と二重にして一つなる生活が、一種の忍従と放棄とを人々の上に強ひて、都市は閑寂な姿をとるやうになつた。我々が奈良へ足を入れて感ずるやうな、山にも林にも、池のほとりにも、何かの響きがのこり、何かの生活の斷片が漂つてゐるやうに感ずると同じ氣分が、此處では更に生々として大地からたちのぼり、身に迫つて來るのを覺える。羅馬へ行く人は何人も感ずるであらうけれど、彼地では歴史が餘りに大きすぎる。現在の羅馬の都市すらその歴史に壓せられて、近代生活はその歴史の陰に呼吸づいてゐる

やうである。人々はたゞ歴史の塵を吸つて生きてゐる。盛時の羅馬はさぞかし厳しきやうである。そのものゝ如き觀を呈してゐたことであらう。瘴氣の立ちのぼるやうな荒蕪たるカンパニヤの廣野を見おろして、七つの丘の上に立ち連ねられてゐた羅馬は、たしかに一大偉觀であつたに違ひない。けれどこの嚴しさそのものには當時の支配者ですら、時々は耐へられなくなつて、もつと柔かな天然を、もつと自由な空氣を、他へ求めたであらうことは察せられる。

16
 コンスタンタン大帝が、アルルを好んで、屢々此處へ來て住まつてゐたといふ心理の一半も之であるに違ひない。此處には、河口近く、ゆつたりした姿を見せたロオヌが雄大に流れてゐる。此處には、紫色に輝く海はほど近くに白い胸を開いて、その流れを受け入れてゐる。此處には河の兩岸に樹木がこんもりと茂り、それによつて緑の草原が、果てなくつゞいてゐる。目をやすめ、胸をしづめるには、當時の羅馬人と

つて、このゴオルの地くらゐ楽しい場處はなかつたに違ひない。

併し、何處へ行つても羅馬人は自國の羅馬を忘れはしない。何よりも先きに水源を求め、水は羅馬人にとつて何よりも尊きものであり、水源は神の住地であつた。羅馬人の足跡の及んだ處に必ず「水の城」の痕跡が、少くも名稱が残つてゐる。これは神聖な場處として、羅馬人には何よりも尊ばれ、保護せられた。次ぎ水路を造つた。やがて人道を、敷石の道を築いた。そして演技場が、つぎに會堂が立てられた。最後に宮殿が出來上つた時、いつの間にか、アルルは「ゴオルの羅馬」と呼ばれるゝにいたつた。

18
 羅馬人が征服した地方には必ず、上述のやうな文明の設備をした。永く住んだ地には更に凱旋門が加へられ、墳墓が築かれた。かくて羅馬の文明はゴオルの土地一帯に敷かれた。けれど、羅馬人は、特にこの南佛蘭西に於ては、被征服者を壓伏はしなかつた。文明の設備と共に、征地の人民の習俗に對しては自由であり、寛大であり、寧ろそれ

と一緒に生活することを樂んだ、征服者被征服者の關係は、近代の諸國の殖民地に於けるよりは遙に圓滑であつた。殊に惡戯好きではあれど、人の好いゴオル人は羅馬人を喜び迎へた。古代文明の姿と、土俗の風習とが共存してゐるのはその結果である。そしてこの兩者が融合して生きてゐるのは、即ちカトリックの會堂である。

ニイムの市へ足を入れた時は、もう私は一人であつた。O君は迫つた用事で、ふたたび北へ、巴里へ、夜毎に襲來する敵の飛行機に脅かされて、穴倉へ逃げ下らなければならぬやうな生活の中へ行つてしまつた。タラスコンの停車場でO君を見失つてしまひ、探し歩いた汽車の窓といふ窓は、盡く北上する兵士でいっぱいになつてゐた。萬歳の聲で感傷的に送られて行く兵士たちとはその顔色も異つてゐた。最後の決戦がやがて迫つて來る頃であつた。

夕日の影がニイムの市の並木路に長く射して、空にはせはしげに鳴交は「燕の群が低く路行く人々の上に高く、古代圓形劇場の黒ずんだ石壁の上に急速に、飛んでゐる頃、私は定めた宿を出て、市中を歩いて行つた。

Dオデは生れ故郷のこのニイムの市で、樹々の茂つた背景を負つて、圓形のかなり廣い水盤に淺くたゞへた水の中に、思ひ深げな姿をして石に腰を掛けて、前方をちつと眺めるやうにしてゐた。彼の「いみじき懐しい微笑」は、こゝに不朽化され刻みだされてゐた。

暮近く澄んだ日の光りは空を流れ、花の香は何處ともなく街路の上にたゞよひ、南國の四月の夕方のみが持つ柔かな、温かな、心をゆるやうな大氣の誘惑は、總ての物の上を包んでゐた。

殆ど完全に保存せられてゐる古代圓形劇場の周圍を私は歩いて行つた。アルルに於

けるよりも、オランジュに於けるよりも、羅馬そのものよりすらも、完全に保存せられた此處のレ・ザレヌは、紀元一二世紀頃に建てられたものである、中世紀は城塞に用ひられ、後には住民の自由の出入に委かせ、大革命以後に初めて保存法が講ぜられたのであつた。夕方近く散歩する人も稀れで、黒ずんだ石壁の表面には、風雨に刻まれた不思議な模様が浮び、その石の間からは、蝙蝠がひら／＼舞ひ立つてゐた。

日が沈んだ後には、澄み切つた透明な夕方が來た。しつとりした若葉の薫りが空を領じて、マロニエの茂みの間から仰ぐ空は、更に色を深め、いまこそ人は深い空氣の底を歩いてゐるのだといふ感じがせられた。「泉の園」こそは、この市の最も楽しい場處である。ヴェルサイユを思はせる木々の茂みと、その下に湧き出づる豊かな清水と、それを湛へるための幾多の彫像を飾つた大きな、水盤と、水路と、夜氣と、水氣とは若葉の匂ひと一つにとけて、それ等の上を包み、その廣い幾條の水路の岸を辿つて行く

ものを、奥へ／＼と吸ひ込ますには置かなかつた。

「泉の園」よりつゞく小高い丘の上にマアニユの塔が立つてゐる。折れ曲がる舊い石段を、樹々の茂みの下を、暫のぼると、丘の頂に、エニグムのやうな角面塔が薄暗の中に立つてゐるのを見た。古代の墳墓か、望樓の一種か、考古學者はいづれとも定めかねてゐるが、そのいづれでもあつたであらう。羅馬人の時代にこの市を圍んだ城塞の中央望樓であつたであらう。傳説の母胎になりさうな古塔である。黄金の鶏卵がその中に藏せられてゐるといふことを信じて、わざ／＼アンリイ四世にその發掘を願つた者のあつたのも、尤と思はるゝやうな不思議に残つてゐる古代の遺蹟である。

この丘の上からは、南國の光景が一望の中にをさめられる。アルノ河に臨んだ丘の上から眺めるフィレンツェの光景を思はしめる。アルルが小さな羅馬であるならば、此處はまさしくフィレンツェである。それほどに調つた、遺蹟の多い、美しい市である。

晴れた日にリヨンのフウルヴィエルの丘の上から、遠くアルプ連嶺の雪を頂く中に、モン・ブランの姿を望むやうに、この丘の上からは、西方に遠く、オルプやエロオの山系の上に抜け出てゐる東方ピレネの一端を望むことも出来る。眼下の野には葡萄島と、橄欖の林と、その間を赤色の屋根瓦をした田舎家が無数に點綴してゐる。

暮れゆく市街は、丘の下に、何となき一種つぶやくやうな物音を立てゝはゐれど、巨きな遺蹟が、總てのものを取りしづめるやうに、また市街全體が一つの生きた古蹟の如く、騒がしい響はなくて、一種の調和が、歴史と時の力とが暗黙に働いて、人々の心を掻き立てないやうに押へて行くその調和が、樹木と、噴泉と、古蹟と、近代生活とより出来てゐるこの感じよき市街を包んでゐた。

實際ニイムの市位は古蹟の豊富で、よく保存せられてゐる處も少ない。そしてそれと近代生活との調和してゐる處も少ない。フィレンツェに行つて、羅馬の巨きな廢墟から

脱れて、生きた藝術の都に入つたと感ずると同じ感が此處でも我々を包むのである。

ドオデとギゾオの生れ故郷、機智と細かな觀察と、温かい心情と、それを包む一種の哀愁の藝術と、精力的な、壓倒的な、ドグマティックな、そして理智的な歴史哲學とは、ニイムが生み出した好個の對稱であり、その兩者を育み、そだて行く力こそは、ニイムそのものが持つてゐる包括力である。

嘗て、こゝは南方プロテスタンの中心地でもあり、宗教戦争には非常な犠牲を拂ひました。併しそれもしづめられて、新宗教の精神は自由に對する欲求となつて、此處の住民に活氣を添へて行く姿とかへられてしまつた。

オウギュスト・コントの故郷モンベリエへ私が行つた動機の一つは、主としてクウルベの畫跡をとめて見、特に彼の「邂逅」を見たい要求にかられてゐたためであつた。

モンペリエはむしろ古い大學町である。十三世紀に建てられた大學が、十八世紀の末に一時廢止せられて、後さらに再興せられたのであるが、醫科の大學は特に著名であり、外國人の學生がいつも多數集つて來てゐる。フランスの南部地方で外國人の年若な人を見たならば、モンペリエの大學生かと必ず人が訊くらぬのである。

眞晝頃の日が輝かしく敷石路を照り返してゐるなかを、私は第一にファブルの美術館へ行つて見た。けれど、何處でも同じく、この美術館も、戦時なるが故に、見張番がないので、閉められてゐた。けれど其處の年とつた番人は、市廳へ行つて、特にこの美術館を見に來たのだからと頼んで見るがよい、何人か君のために、開けに來てくれるかも知れない。兎に角、此處には鍵がないとの事であつた。

暑い町なかを市廳へ行つて、この旨を話したところ、「貴方は日本の藝術家か」と訊くので、いや、たゞの學生だが、巴里から此處の美術館を見に來たのだから、出來た

らば開けてくれまいか頼むと、暫くまつてゐてくれ、いまその鍵を持つてゐる男が來るからとの事であつた。

これもまた一人の老人が、私のために鍵を持つて、近道を選びながら、家と家との間の細い敷石路を、美術館まで連れて行つた。日本は美術の國だとか、此處の美術館へも日本人が時々來るとか、話しながら連れて來た。

その老人と私と二人しかゐないミューゼの薄闇の中は、可成り不思議な光景であつた。有ゆる時代の、また歐羅巴の有ゆる國の藝術品が、暗い中に、ちつと黙つて、何者かの來るのを待つてゐるやうに、並んでゐた。特に彫刻の室では、何者かの囁きの聲が聞こえるやうであつた。

近代人の室のなかで、私はクウルベを見出した。彼が南國の知人をたづねに、旅行囊を背に、右手には杖を持つて、此地へやつて來ると、その知人は家僕と共に、犬を

つれて、彼れを迎へに出た途上で、はしなくも邂逅した。

畫家は左手に帽子をとり、頭をそらせ、頸髯を突き出だし、知人は右手の杖で身を支へ、左手を開いて迎へ入れる態度を示してゐる。家僕はその傍に恭しく立ち、犬もその四肢を張つて、主人の側に立つてゐる。それは廣く垂れかゝる青い光の澄んだ南國の空の下である。それは眞白な土に、畫家の影が後方に投げられてゐる路の上である。畫家は思はぬ悦びと、愕きに、進み出た右足をよどめて立ちどまり、知人は靜かにその來着の悦びを述べてゐる。

この空の青い光は、南國の空の藝術化、不朽化であり、この眞白い路は、その上に立つてゐる人物は、フランスのレアリストの的確な表現である。クウルベのなかに時出逢ふロマンティックの趣味は、この畫面には全く浮んでゐない。南國の明るさが彼のロマンティスムを照らし盡くし、その影すらなくなさしめたものゝ如く思はれる。

私はクウルベとシャヴァンヌとの對稱のなかに、佛蘭西近代のレアリストとイデアリストの對稱を見るのに、その當時興味をひかれてゐたが故に、この畫面の前に立つたときは、彼のレアリスムの極致をとめて見たやうな氣がした。霧と神祕との都、シャヴァンヌの生地リヨンに於ける彼の作品と、日光と青い空色の南國に於けるクウルベの作品とは、現實と宗教的神祕との對稱のやうに思はれて、此處まで來て初めて來べきところまで來たやうな心地がした。

私を導いて來た老人に禮を言つて、心ばかりの感謝の意を呈して、私はこの美術館を出た。そして、遊歩場の方へ一人で歩いて行つた。

晴れた日の午後の光りは、小高い遊歩場の隅々までを照らし、遠い空に綿雲が細くなびいて地平線近くにかゝり、豊かさを思はせる緑濃き樹々の茂みと、赤色の瓦屋根と、青い牧場とが、目路の限りを埋めてゐた。

見ると、この遊歩場の側に白日の照り渡る下に、大きな、高い、十字架の十字架像が立つてゐた。白日の中になどよふ怖ろしい夢の姿のやうに、しかも消すことの出來ない確かな存在を主張するものゝ姿のやうにして、立つてゐた。

苦しげな悩み、醜いまでに苦しげな悩み、人間苦そのものを示してゐるやうなクリストの顔、これは恐らく近代のものであらう。この醜い苦惱のなかに、何處に救済昇天の姿を求めることが出來得よう。白日の中に、この醜い苦惱の姿を曝らしてゐるのが近代人の生活である。霧のかゝるブルタアニユの小村の四辻などで見かける舊い十字架像には、決して斯様な醜さはない。時代と共にクリストの面貌が變つて來た。宗教に靈の慰藉を求めるよりは、宗教に託して苦惱をうつたへることのみが近代人の生活となつた。クリストは地上にのみ住むやうになつた。同時に神は死んだ。十字架像はその神の死と、人間苦とを代表するやうになつた。

歐羅巴の土壤の上に、この苦惱の表象たる十字架像の立つてゐる限り、その下では、人々が悩み、苦しみ、争ひ、殺し合ひ、そして嘯み合つてゐる。クリストの面貌にふたゝび新しい變化の見えるのは何日のことであらうか。

私の胸には、この苦惱の架像が、南國の日に容赦なく照りつけられて、身をかくす木蔭もない痛苦の架像が、深く刻みつけられて残つてゐる。

地中海

つひに、また我はおん身に逢ふ、あはれ、純き波しく海よ、日光に微笑み、嶮しげなれど、魅力持てる、

我が愛人、おゝ、おん身こそは、動亂のたゞなかにも、常に藍青に住し能ふ。

我はおん身へと來ぬ、霧降る大洋と、

果しなきその愁訴、荒き波とに疲れはてゝ、

おゝ、おん身の岸の有りとある明るさの、

我が眼より、我が胸へと入り來らんと。

我は渴もて、おん身の日に燃ゆる岸邊に散り生ふる黄橙樹の

風に揺らるゝ白き花を、

おん身へと枝くねらする二千歳經し巨人、おん身の橄欖樹を、

見んと願ひき。

突裂れたる大地より、花崗岩のアルプ連嶺の湧出せし時、

その脚下に、微風の呼吸に身慄する

おん身の藍青の日に閃くを見て、

彼女等は驚愕しつ。

かくてその刹那より、厳しき大嶺は

雷光に碎かれし裸々たる項を昂げ
おん身の前に佇み、廣漠たる空の高さより、

微笑むおん身を眺むるのみ。

山は古い、人は長き冬の

悲しみの、そが白き皴立つ額の上を壓するを覺ゆ。

さはれ、踴躍するおん身の中に、おゝ海よ、何人か、

不滅の若さを見ざるべき。

(ギニョオの「地中海」の最初の六節)

地中海の「藍青の岸」で、幾日でもを過したものとつては、其滞在は終生忘れ難い
印象となるであらう。いまだ卅三歳の若さで死んだ天才的哲學者、ジャン・マリイ・ギニョ

1923
1888

ヨオはその病軀を養ふために、この日光の明る輝く地中海の岸邊で、或はニスで、
或はマントンで晩年を送つてゐた。

彼が死んだ千八百八十八年には、此地に稀な強い地震があつた。それがため、彼は
幾夜も、濕つた小さな小舎の内へ避難してゐなければならなかつた。これが彼の病軀に
とつては、致命的なことであつたのは勿論である。そして同年の三月三十一日に遂に、
この岸邊を去らずに死んでしまつた。

ニイチュが同じ病軀をこの海岸で養つてゐたのは、同時代であつた。そして彼はギニョ
イヨオの著書を、及び常にギニョイヨオに伴つてゐたアルフレッド・フワイエの著書を、ニ
スの書店で求めて讀んでゐた。ギニョイヨオの方ではそれとも知らずにゐたのであつた。
ギニョイヨオの「哲學者の詩」と題する一卷の詩集中では、南國及び、地中海の岸邊の
詩がとくにすぐれてゐる。平明で、一點の陰影もなく、彼の美學が示してゐるポジイティ

ヴィストの思想と、彼の詩情とはよく一致してゐる。彼は佛蘭西人が持つてゐるサン

ス、プラティックを最も好く美學上に用ひた一人であると、私は信ずる。

彼は千八百八十年の末にこの詩集を出版して以來は殆ど作詩はしなかつた。即ち彼の二十四歳の時の詩集であるが、その死後、遺稿の中から見出されたのが、「蟬ラモル・ド・ラ・シヨルの死」である。これは彼の詩への告別であり、彼の生命への告別であると、アルフレッド・フウイエは言つてゐる。

グレエスの太陽の歌ひ手よ、

一日の寒さにも凍ゆるおん身よ、

おん身こそは、歌ひつ、やがて死に行く

我が若き命に似たるかな。

若くして、歌ひつやがて死んだこの天才美學者は、一方にスペンサアを、他方にニイチエを對照者として持ち、最も佛蘭西人らしい社會哲學と、社會美學とを残した。短かい彼の一生の如何に清純であつたかは、他日述べることにする。

印象派畫家の赭い岩と、深碧の波と、ルノアルの「いつも美しく、いつも春らしい」、藻草でもくどつてゐるやうな、あでやかな裸形の女性と、これは、手近に見られる地中海の岸邊の藝術化されたものである。

アンティプ岬の松林の中へ、畫室を構へてゐたK君を訪ねるために、マルセユから殆ど十時間ほど、暑い日中の汽車に揺られて、アンティプの停車場へ降りたのは、千九百十八年の四月の初めであつた。

停車場では、海水帽に、白の縞ズボンのO君と、最一人の若い畫家F君とが私を待つ

てゐてくれた。K君はニスへ知人を探ねに行つて、次ぎの汽車で来るからといふので、皆なで待ち合はせることにした。

入方の日がアンティブの古塔の上へ反射して、海は夕なぎの静けさと、沖の靄とに包まれて、一日の間烈しい日に照り付けられた後の疲勞を見せてゐた。白い大地からは射熱が立ちのぼつて、私達を包んだ。海岸に立ち並ぶ棕櫚の樹が、日光によれた葉を、そろ／＼上げかけてゐた。

停車場へ降りた時、迎へて呉れた人々が第一に私にかけた言葉は、「マッチ？」はといふことであつた。それほど私達は、到る處で、マッチと煙草とでは不便を感じてゐた。リヨンかマルセユで、若しマッチが見つかったらば出来るだけ多く買つて來て呉れと私へ出したK君達の手紙の着かない中に、私はリヨンを立つたので、その最初の間ひの意味は解せなかつたが、私はたゞ此處でもまた同じ不便が人々に迫つてゐるので、

何人でも見掛け次第に、必要なものを尋ねるのであらうと思つた。が、間もなくニイスから着いたK君もまた私と挨拶をするかしないに、「マッチは？」といつた。私は笑ひ出したくなつた。人の顔さへ見るとマッチばかりせがむ人々だと思つたが、若し人が、實際、火を燃やす手段から遠ざけられたとしたら、随分困るに違ひない。リヨンの下宿屋などでも、煙草を喫ふに決してマッチは使へなかつた。戦争の手はこんな日常生活の中までも入り込んでゐた。一つのマッチの小箱を買ふなどは全く望めなかつた。一本のマッチを床板の間から探さして、悦んで拾ひ上げて、塵を拂つてポケットへ納めたことさへあつた。

私達は砂糖の全くない半年を送つた。マッチのない、煙草のない、石油のない、石炭の缺乏した、パンの制限せられた、肉の無くなつた即ち火のない、燈火の殆どない、食糧缺乏の十六年から十七年へかけての冬を送つた。十八年の初めは、この缺乏は更

に烈しく我々に迫つて來た。少くも戦争は、我々に日常生活の中で、原始時代を思はせるに十分であつた。併し、平時は我々になくてならぬものだとすら感ぜられないほどの、これ等の必須品までも奪はれてしまつたこの原始状態に於ては、却つて一種嚴肅な緊張味のあるものである。物の初め、物の終りに感ずるやうな、氣の散らない、油断のない、集注氣分が我々の意識を領するものである。

併し、原始人が冬よりも夏を愛し、自然の恵みのより豊かな時期に、自由な活躍をなしたやうに、またこの夏が去つて秋に移る間に、一種の必然的な悲しみを味はつたやうに、このやうな原始状態に置かれた人々は、必然的に「永久の夏」たる南國を、また「藍青の岸」を求めて行かずにはゐられない。巴里を敵軍の砲撃で暫時追はれた我々の心は、全く原始放浪者の南を戀ふる心持であつた。

38 アンティープ岬の松林の家へ行くのに、我々は岬に沿うて、海岸を通つて行つた。海

香が、白い、平かな路の上まで漂ひ、松林の中からは廻轉燈臺が、巾廣い光りを時々海上遠くまで投げてゐた。そして薄月が濃い空色の中から光りを投げて、我々の影をおぼろに前へ前へと浮び出させた。

輕やかな馬車のきしりが路の曲り角を向うへ消えると、その後から輕装した二三人の婦人が若やかな笑聲をしつとりした夕方の空氣の中に漂はせながら、足早に行くのが見えた。

黒い松林は、巨きな禽が翼をひろげたやうにして、岬全體を包んでゐた。その翼の中にくゞつてゐるやうにして、幾つかの別墅が散在してゐた。

K君の家は、廣い薔薇畠を奥まで行きつめて、棕櫚の樹や、黄橙樹やの立ちこめた中に立つてゐた。後ろは小高い松林の丘になつてゐて、前には以前船乗りであつた人が建てた小さな望樓のある住家があつた。

K夫人は我々のために家兔の料理をつくつて置いてくれた。蠟燭の光りが我々の愉快な食卓を照らした。ピヤンカといふ伊太利名をもつた眞白な山羊は、戸口につながれて、老人のやうな鳴聲を立てゝゐた。鳩舎の中からは翼を押し合つてゐる鳩等の時々、と鳴くのが聞えた。その鳩舎の下には幾つかの兎が身を擦りよせて寝てゐた。

巴里を追はれて以來我々は一ヶ月目ぐらゐで、同じ食卓を囲んだのである。明敏なK君と華かなK夫人と、敏捷なエスプリの所有者O君と、日本から来て間もないF君と、我々は久振りで思ふまゝに語り合ふ機會に接したやうな気がした。

時々遠くから蛙の聲が聞こえて來た。夜氣に薰る薔薇の香が食卓の上まで忍び入つて來た。松林の中からは、またロシニョルが歌ひはじめた。ノスタルジイとエサゾティスムとの入りまじつた氣分の中で、我々の會話は果しなく題目を更へた。

階下が三つ、階上が四つと、後方に張り出しのやうに出來た一室を持つた此シャレエ

は、前面に廣いバルコンを持つてゐた。私達は階上の一つ一つの室に、蚊帳を釣つて眠つた。

小鳥の聲と、山羊の鳴き聲とに目醒めた私は、バルコンの上から、薔薇の香の立ちのぼるかぐはしい朝の大氣を吸つてゐた。薔薇の花を摘む人達が、畠の中に見えがくれして、満開の赤い花を摘んでは、一所に山のやうに集めてゐた。それをグラスへ送つて、香水の材料にするとの事であつた。

朝食後、我々は日課を定めた。K君とF君とは、それ／＼の方面へ寫生に出掛けた。K夫人は手傳ひに來る大屋の老婆を相手に家の掃除と、買物とに従つた。O君は、専門の法律書の勉強に人の居ない場處を求めて行つた。或は海岸の岩陰に、或は草の深い中に、或は杉林の中に、座像の如くに黙思してゐるO君の姿が見られた。私は多く裏の松林の中で、その頃興味をひかれてゐたギュヨオの諸作を読んでゐた。

晝飯には皆が集つた。午後は、暫時の勉強の後は、海岸や、松林の中やを歩き廻つた。

この日課は暫く嚴格に守られた。實際、K君にとつては、この地中海の岸は、何處よりもよいアトリエであつた。松林でも、薔薇島でも、地中海そのものでも、家でも、窓でも、盡くK君の晝中に生きた。「美しき月、マリヤの月」はこの家から生れた藝術である。實際、我々の書齋も、晝室も到る處にあつた。

我々の午餐の、とくに晚餐の食卓は賑やかであつた。O君は海岸で勉強してゐる間に耳にして英國の少女の歌聲を讃めた。K君はアンテアプへ岬の中央を通ふ電車の中で時々出逢ふ女性の美をたゞへた。藝術とは何ぞ、そんな問題はいつも果しく論ぜられた。

我々の前に廣い胸を開いてゐる地中海が、何かにつけて我々を捉へないことはな

つた。或時は、晚餐の食卓を賑はすために我々は釣りを試みた。あまり成功はしなかつたが、我々の間には、様々な釣魚の工夫が講ぜられた。いづれもイデアリストの考へさうな、實現せらる可きものではなかつた。或時は、海は我々をその胸の上へ、或はその胸の中へ迎へた。また或時は、夕月の下を、小兒のやうに、その岸邊を歌ひながら何處までも歩いて行つた。

午前のうち海は輝く空の下に、その水平線をくつきり浮べて、なごやかに、晴やかに、一種の奏樂をその胸から立ててゐる。空と水との合奏が、微妙な動波となつて人の五官を掻き立て、この大元の奏樂の中へ我々の胸の鼓動をも合せしめる。

小高い松林の丘へ来て、胸をしづめ、耳を澄ませてゐると、自分の身が一つの影のない透明なものに化して、松の香と共に、海の匂と共に、同じ微動をなして、四方に散つて行くやうに覺えた。ほがらかさとはこの状態を呼ぶのであらう。

午後は、日の光にぼかされて、水平線もおぼろになる。左手にアルプ連嶺の雪を頂いてゐるのが、輝かしく海上に浮んで、ニイスの市街が、またその日光を反射してゐる。午後の暑さは、海の彼方に、砂の焼けた老大陸の横はつてゐることを思はせるに十分であつた。とろ／＼と油のやうに濃い波が、煮えたつやうに、その苦しさに耐へられないうやうに、岩崖へ来ては碎け、砂濱へ押し上り、日光のあまりまぶしさに惶てゝまた引き返して行つた。

或日の夕方、稀に見る曇り日で、風が荒れてゐた。海からの風が、岬の松林を高く鳴らして、飛沫が高く、白い路の上まで撒き散らされてゐた。「冬に於ける地中海の荒れ」を見せるやうな日であつた。

44 私はその中を一人で、風に吹かれながら歩いて行つた。波は岸へ寄せて来ては、路まで上らうとするのが、最少しのところで手がとどかず、口惜しさに、引返し、ま

た寄せて来た。見ると、私の行く少し先の處を一匹の犬が、この波と競争するやうに、走つたり、吠えたり、時には嚇しつけるやうに、波頭に向つて嘯みつくやうに鳴き立て、今にもそれに飛びかゝりでもするかと思はれた。時には、高い岸の上へ來ると、身を大地へ据ゑて、前脚を前へ伸ばして、頭を上げ、波を見おろすやうに、またからかふやうに、時々、小聲で叱りつけでもするやうに鳴いて、いかにも自分の優越してゐるのを悦ぶやうにも見えた。

私は、知らず／＼その後をついて行つた。砂地になつて、波が一勢に勢よく、その上へ押寄せて來ると、犬は、毛を立て、四脚を張り、殆ど悲鳴に近い聲をあげて、大きな敵に向ふやうな態度を見せた。と、思ふと、不意に、隙をねらつて逃げだし、遠くはなれて、聯合して押寄せるこの眞白な敵の疲れざる力に呆れて、見てゐるやうでもあつた。けれど遂に、その敵が、自分を何處までも追つて來るのではないと思ひき

めたのか、丘の麓の松林の小徑の方へのそくはいつて行つたが、それでも時々立ちとまつては、また遠吠をたてゝゐた。

私は不圖、ミシコレエの「海」を思ひだした。あの革命の歴史家は、人間生活の革命を、あれくらの興味深く描き出して來たと同時に、自然の歴史をも詩人のやうな眼で研究した。彼の「海」でも、「山」でも、「鳥」でも、「昆虫」でも、我々には非常に面白い。その「海」の中で、彼は海の恐怖が原始人に、また動物にさへも及ぼす効果を説いてゐる。馬は満潮に出逢へば、岸の上で身を慄はせ、その側を通ることを拒む。犬は、波を見ては身を遠のけ、吠えたてる。或る旅人の話に、カムチャッカの犬どもは、波の荒れる光景にはいつも馴れてゐるはずであるが、それでも、岸へ寄せて來る北の海の荒れ狂ふ夜は、その長い夜の間ちう、幾千となく群をなした犬どもが、岸邊に並んで、波頭に對抗して、唸り聲を競ひ、一齋に跳りあがり、その集合の力で、この強敵を壓

しようとして、毎夜つゞけてゐる。殊に暗夜の波に對しては、これ等の犬どもは殆ど狂氣のやうになる、との事が記してあつたのを、思ひ出した。

この本能を、南海に於てゞさへ、私の前を行く一匹の犬が見せたのであらう。彼は波と戦ふべき伴侶がないので、その争ひを見きはめて、林の中の住家へ歸つたのであらう。

或日私達はグラスにゐる筈のマアテルリンクを訪れるために、カンヌまで行つた。白耳義のリュージュ大學の教授で、戦争で追はれて、巴里のソルボンヌで中世紀文學を教授してゐたウイلمット氏が、マアテルリンクの友人であるといふので、同氏からマアテルリンクの居處を確かめて、手紙を出して置いたが、當時、マアテルリンクはアメリカへ行き、またベルジックの戦禍に罹らないほんの僅かな土地へ歸つて、講演したりし

て、殆ど居場處は定まつてゐなかつたので、返辭はまだ手にしてゐなかつた。ニイスの市長宛て、マアテルリンクの居處を確かめにやつた手紙の返辭すら、私が巴里へ歸つてから初めて受取つたやうな次第であつた。

カンヌで調べて見ると、最早マアテルリンクはグラスにはゐなかつた。多分、北方のセイヌ河の下流の方へ行つてゐるだらうとの事で、巴里へ歸つてから其方へ尋ねるところにした。

「我々の民主國で、カンヌは稱號タイトの市である」とモオパッサンは言つてゐるが、カンヌのみならず、地中海の海岸の市には、或種の避難者が多く來てゐる。第一に健康上の避難者が、つぎに社會上の避難者が來てゐる。そしてこの後者が所謂稱號タイトの人々である。

モオパッサンの「水の上レイウル・ド・ル・オ」を書いたのが千八百八十七年とすれば、當時、第二帝政時代

の貴族の避難者も多かつたことに異ひない。それから、これは避難者ではないが、アメリカ人が多い。英國の貴族がゐる。そして今日では、ロシアの避難者、即ち他國へ流浪の舊時代の貴族が多い。彼等の中で金を持つて脱れた者は生活をつゞけてゐるが、領地を失つて、収入のなくなつた者は、路上に迷ふものすら出來た。ニイスで自殺したロシアの公爵などもあつた。それと同時に、ロシアの皇室附きの樂人等が、樂器を抱いて、地中海の岸まで逃げて來たのが、時々演奏會をひらくなどもあつた。

また戦争當時は他の種の避難者がゐた。それはセルヴィアの孤兒の群である。眞實の孤兒であるか、たゞ單に兩親を見失つた連中であるか知らないが、黒衣の尼僧に引きつれられて、海岸を辿る多數の子供等を見掛けた。モオパッサンは七十年戦争の慘事を説いてゐるけれど、千九百十四年以後の有様を見たらば、何といつたであらう。我々とてもまた一種の避難者である。健康上でもなく、社會上でもなく、たゞ戦争の純なる

避難者である。この種の避難者がまたなかく、数が多い。

カンヌの海上に、松林で覆はれたサント・マルグリットといふ島がある。船で三十分程の距離にある。この島に、十二世紀に築かれた堡塞がある。この堡塞の中へ千六百八十六年から九十八年まで、ルイ十四世の命令で幽閉されてゐたのが、有名な傳説の「鐵假面」の男である。これはルイ十四世の双生児ふたごの兄弟であるとも、マアイオと呼ばれた反逆者であるともいはれる。後にバステイエへ移されて、千七百〇三年に、「鐵假面」をかぶつたまゝ死んで行つた。

同じこの堡塞に、メッスの降將バゼエヌが、千八百七十三年十二月から、翌年の八月まで幽閉されてゐた。バゼエヌの此堡塞からの好奇な脱走の有様は、モオパッサンが「水の上」のなかで詳しく書いてゐる。彼は此處を脱出して、船で西班牙へ渡り、其處で八十八年まで生きてゐた。従つてモオパッサンが、此處へ来て、その脱走の有様を聞

いた頃、バゼエヌはまだ西班牙で存命中であつたわけである。

千九百十七年の初めから、カイヨオ事件が巴里で盛に人々の口にのぼつた。而てカイヨオとバゼエヌとの並稱比較が屢々耳にせられた。七十年戦争に、メッスの城塞に籠つて、その軍を率ゐてピスマルクに降つたバゼエヌと、佛獨の聯盟をつくつて英國へ對さうとする政策を立てたカイヨオとは、いつも人々が口にするところであつた。

フィガロ新聞の主筆カルメットをピストルで射殺して、しかも無罪を宣告せられたカイヨオ夫人が、夫の政策陰謀にあづかつてゐるのだとの風説もあつた。この夫人の虚榮心がカイヨオを驅つて、獨逸の密偵の手から巨額の金を受取らせるやうにしたとの話もあつた。戦時中にも關らず、カイヨオは屢々獨人と密會したとか、文書の往復がどうだとか、新聞の記事は毎日非常な賑かさを見せてゐた。それからつゞいて、カイヨオの部下は、戦時の犯罪人として、ヴァンセンヌで銃殺せらるゝものが幾人か出た。國

外へ放逐せられるものもあつた。主犯のカイヨオの刑罰は何であらうかと、それが少からず人々の注意をひいてゐた。

その時バゼエヌの裁判がまた人々の話題となつた。バゼエヌは七十三年に判決を與へらるゝ前に、法廷へ引き据ゑられた。その時、彼が敵軍への降伏の理由として述べた事は、帝政既に倒れ、佛國政府の存在が認められなかつたがためであると。それに対しての判官の言葉はかうである。佛國政府は倒れたであらう、けれど、「佛國は常に存在してゐる、元帥よ、」*「La France existe toujours, Monsieur le Maréchal」*

そこで、バゼエヌは終身の禁錮を宣告せられ、このサント・マルグリットの島へ送られたのであつた。この島で八九ヶ月送つてゐる間に、バゼエヌ夫人はヨットを買ひ求め、番人に賄して、夫を救ひ出し、西班牙へ逃げたのであつた。

カイヨオの判決宣告は戦後になつてからなされた。たしか一昨々年であつたと思ふ。

彼は一定の住地を限られて、其處から出ることは出来ない。巴里へ来て醫者の診察を受けるにも政府の許しが要せられる。一種の禁足ではあるが、幽閉ではない。恐らく今は、平和な晩年を送つてゐるのであらう。

このカイヨオ、バゼエヌ兩者を比較する事が果して當つてゐるだらうか。その手段に於てこそ、種々非難を加へる餘地は十分あらうけれど、或る佛人にとつては、單に政治上からのみでも、佛獨同盟といふ考は可能であつたに異ひない。その反對に、若し此兩國がいつも友情を結ばず、一方は復讐の念を、他方はその復讐の恐怖を、抱いてゐるならば、地球の表面には、常に不穩な地帯が存在する。カイヨオのとつた手段は知らないこと、その思想のもつと本然的なものが、佛國側にもなければならぬ。その本然性を必然的に代考してゐるのがロマン・ロオランの藝術である。

たま／＼このカイヨオの事件が、戦争最中に起つたものであるが故に、彼をもつて

直ちにバゼエヌに比較せんとするやうな感激現象が生じたのである。

このサント・マルグリットの島に近く、より小さなレランの島と、更に遠く、サント・ノラの島が、いづれも松に包まれ、深碧の波の中に、晴やかな日を浴びて、さまざまのロマンスや、陰謀や、事件や、歴史や、變遷やなどは関係のないやうな、おだやかな姿をして浮んでゐる。

或日、我々はまたニスへ、モナコへ行つた。アンティブからモンテ・カルロへの路は、到る處が庭園市である。山は薄紫を基調とした銀色に輝き、日は明るく、空は蒼く、海は深碧に澄んで、薔薇の花は崖の上に、屋上に、バルコンに、籬に、路傍に、南國の薫りを立て、黄橙樹オランジュと橄欖とは濃い常緑の光りを反射し、香氣と光りとの溶け合つた大氣は、一方は無限の海上へ、他方は丘上から海濱へ立てつゞく無数の別墅ヴィラの上へ、南國の四月の暖氣を降りそゞいでゐた。

ニスは小さな南方の巴里であつた。戦時は巴里で得られなかつたものも此處では得られた。此處も避難者で充滿してゐた。常は十萬近いぐらゐの人口が、當時は三倍以上になつてゐた。旅舎などには、勿論一つの明間とはなかつた。

この現在は遊園地たるニスも、その起源は古代戦勝の結果から出来た市である。そしてその後、中世紀から十九世紀の半ばまで、常にその所屬が變つた。遂に千八百六十年、住民の自由投票の結果、完全に佛蘭西のものとなつたのである。

伊太利統一の人傑の一人、ガリバルディは千八百七七年に、この争奪地帯たるニスの市に生れた。恐らく彼が統一に對する憧れは生來の要求であつたのであらう。そして、彼が伊太利の統一に身を盡くしてゐる間に、生れ故郷は、既に佛蘭西のものとなつてしまつた。彼の立像は今の生地ニスの丘の上に、全市を見おろすやうに立つてゐる。

天使ペニシエンジュの畫のやうな港灣に臨んだニスの市は、午日の光りで白く輝き、遊歩場

の南国性の植物は、一層の香を立て、溶光と蒸氣とは、木蔭に憩ふ人々の身邊をも包んで、總てが、溶けて流れて、空中に漂ふやうな、しかも晴やかな、明るい律動となつて四散するやうな、氣分である。

半島と岬角とに圍まれて、奥深く隠れてゐるやうなヴィルフランシュの港には、伊太利の軍艦が二艘ばかりはいつてゐた。ツウロンの港を獨逸の潜水艇に砲撃せられて間もない頃のこととて、この海岸一帯の小都市でも、警戒は怠らなかつた。夜は一切の燈火を點することが禁じられた。そして汽車の走る松原の中の、兵舎の周圍の草の中から、赤色帽をかぶつた眞黒な顔をしたセネガル兵等が幾人も頭を上げるのが見られた。彼等は防禦のためか、或は歸休の意味でかこの海岸へ送り來されたのであつた。長さ三十丁にたらず、巾も廣くて十丁に及ばないほど小さな一獨立國、モナコの公國は佛蘭西の永久の捕虜のやうなものである。人口もこの半島の上下を併せて一萬

餘人しかない。この小人の國も、一國の體面としては戦争に際して、獨逸へ宣戰を布告せずにはゐられなかつた。

停車場から出て、廣い坂路を、この半島國へと登つて行く、アルベル公の宮殿がその上に立つてゐて、公の不在中は何人でも自由にその中を見廻ることが出来る。その宮殿の前の廣場には、ルイ十四世が贈つたといふ舊い大砲が据ゑてある。

この小さな宮殿内を、番人が先きにたつて、説明を加へながら、訪問者を導いて行く。東洋の美術品なども多少はあつた。この頃では何處へ行つても、支那の美術品などのあるのを説明するのに、日本から來たものであるといふのを耳にした。二十年ほど前ならば、その説明は盡くその反對であつたとの事である。なほ暫く経てから、初めてその説明が正當なものになるのであらう。

この小さな、小高い半島の中に、會堂も、學校も、公園も、遊歩場もある。更に奥

の方には、海洋學の博物館が誇らかに立つてゐる。モナコ公、フランス・アルベールは現今では、海洋學の世界の泰斗である。彼が巴里へ來て、海洋學の講演をした場處には、その記念の文句が刻まれてある。この小國もこの點に於て、その存在の使命を世界へ向つて果たすことが出来る。伊太利の現在王が、古錢學の泰斗として世界に知られてゐると好き對稱である。

この博物館の中には、海洋に關する有ゆるものが藏せられてゐる。科學的見地からものは勿論、藝術上のものすら蒐集せられてゐる。繪畫でも、陶器でも、廣重の描いた魚屬すらも藏せられてゐる。

この半島國を降りて、對岸のモント・カルロへ來ると、此處にはモナコ公國の唯一の財源なるカジノが立つてゐる。

學生は入場が出来ないといふので、プロフェッスルとして初めて許された。カジノは

ルネエザンス式に出來た壯麗な建築物である。廣大な演技室のほかに、音樂堂も、舞踊室もある。壁畫も、ドラペリイも、名匠の手でなされたもので、華麗な氣分が十分に漂つてゐるはずであるが、演技室の空氣はいかにも重苦しい。

幾つとなくならべた演技臺の兩側に、禮装した官人が、演技の監督もすれば、指圖もし、世話もする。賭けられた金錢を集めるのはその役人の仕事である。演技盤の指針を動かすのも彼等の仕事である。回盤の中を走つて、或る指示してある數字の上へ、小球が止まると、その數字へ賭けた人が全體の場錢を自分の所有とすることが出来るのである。演技者の眼は一様に鋭くこの小球の廻走するのに向けられてゐる。中には表を作つて、多く當る數字を發見しようとする苦心してゐるものがある。

華な裝飾をした婦人が、殊に太つた金鎖を掛けつらねた老婦人が、また白髯の老人等が、幾つとなき裏を圍んで、この運命の遊戯に夢中になつてゐる。幾十幾百の人が

集まつてゐても、この室内では笑ひ聲一つない。重い空氣が總てのものを壓してゐる。ヴェルサイユの平和會議の光景である。運命の遊戯化であるのか、遊戯の運命化であるのか、その中から自殺者が出る。床板を上げれば下は海で、小船はいつもその下に用意されてゐて、その自殺者を運び去つて了ふ。

かういふ運命的遊戯本能を人間が持つてゐる限り、このカジノは存続するのであらう。そして、それと同じ遊戯がまた到る處で、更に大げさに、更に嚴めしく、更に堂堂と行はれてゐる。平和會議、國際聯盟、四國協調、これ等は丁度ナポレオン没落後のウィнна會議の如く、一種の喜悲劇である。その中から或る國が生れ、或る國が亡び、或る國が榮える。けれど人類は、それに關らず、依然として存続もし、繁榮もしてゐる。

60

我々がカジノを出て來る時に、丁度すれ／＼に中から出て來た若い三人の女性は、

61

「Sale Boite !」 (畜生め、こんな處) と口ぎたなく罵りながら、我々を追ひ越して行つた。恐らく彼等も運命の失敗者であらう。

ヴェルサイユ

人間の集合生活が作りいだす歴史の相は、各時代が要求した藝術に具體的の表現を示して、その中に永遠化せられ、累積せられて、果しなく續いて行く。

大海の水が、その流動の勢ひを強く表示せんとする要求にとらへらるゝ時、湧き立つ波となつて立ち昂る如く、各時代の生活者等が、その時代の生氣を最も力強く、最も自然な姿に於て示さんとする表現慾にとらへらるゝ時、藝術の波は油然として湧きあがつて来る。

その表現の跡の最も顯著であつて、一見して明瞭にその時代の人生が求めた表現の形式を、藝術の波浪の姿を、掴み得るものは、特に成形の藝術であり、更に建築であ

る。

巴里の美の一半は、この累代の生きた歴史の波浪が打ち寄せたまゝに凝化せられ、純化せられたる集積にある。人はそのその時代の藝術の波層が限りなく打續く中を歩いて、科學者が地皮の斷層面より地球の歴史を讀む如く、現在までも生きて動く人間の中心要求の歴史を讀むのである。

神祕と熱意とに燃えてゐた中世紀のゴシックの會堂から、理智と統一とに綜合の姿を求めたクラシック時代の宮殿から、自然と個人權とに熱狂した革命期ロマンティックの彫像から、民衆の力が次第に強くなるにつれて、オテル・ドゥ・ヴィルが、學校が、普通の住宅が中心となつて來た近代の建築物から、更に一方には世紀末の痛苦を示すと同時に、他方には自然の力に魅り、大地の生氣を呼吸する人間の靈の態度を示す現代人の彫刻から、我々は、各時代が示す表現相の奏し出す合唱曲を不知不識の間に、感受せ

すにはゐられない。

巴里は藝術の都であり、生きた歴史の都であり、過去が現在の中に生き、現在が刻々に、従來の藝術の波層の上へ、更に新らしき波層を刻みつゝ行く都である。時の歩みがいかに藝術に翻譯せられ、具體化せられつゝあるかを意識せずにはゐられない都である。巴里は於ては總ての人が藝術家たらずにはゐられない。此處では時の歩みと共に、環境と共に、大氣と共に、人々が自由の正眞の中心表白がなし得られる。巴里全體が巨きな彫像の群立であり、その群像の立てる綜合の音楽が、大氣をゆるやかに揺り動かしてゐる。

セエヌの流れが、マロニエの若葉が、更にその流れの末を照らしてゐる落日が、その後の半天を染める牡丹色のクレピュスキュルが、人間の藝術と調和し、協力して、全體の仕上げをなしてゐる。恐らく、自然もこの藝術の都、表現力の盛んな、しかし静

穩な都會に對しては、決して他の場處で示すやうな暴力を振ふことは出来ない。時あつて、岸を嚙んで溢れ出づるセエヌの洪水も、直に藝術の捕虜にせられ、タブロオの中に收められ、建築物に記念の波痕を残して行く。

されば、大革命の如き騒亂時代にも、他の或る邦などでは到底なされ得まいと思はるゝことが、此處ではなされてゐる。千七百九十三年、所謂恐怖の年に於て、ルイ十六世の最後の年に於て、革命の議會は、二百二十萬フランの懸賞金を議決して、有ゆる畫家、彫刻家をして、革命の藝術的表現、時代の湧き上り、盛り上つた姿の具體化を求めた。歴史家の所謂、「革命は常に大事業の各方面に於て正當なる人を見だす」のである。同じ年のルウブルで開いた第二回目のサロン(第一回は千七百九十一年)には、千人の出品者、九十五年には三千〇四十五人の出品者があつた。

更に革命議會は五十萬フランを議決して、中央美術館の施設をし、千七百九十六年

には、佛蘭西全國の各都市に、繪畫、彫刻、建築の學校を設けて、一般人の自由なる表現を易からしむる途を講じた。

藝術を消閑の具と考へ、高尚なる娛樂と思ひ、文藝を弱者の遊戯虚飾と思ふ如き空氣の中に育てらるゝ國民が世界の何處にでも今日なほ存するならば、氣の毒である。少くも一國の少數者のみはその國の藝術を專有し、大多數はそれに目を向けることすら許されない國があるならば、これくらゐ不合理なことはない。更に、藝術の創造力が一國の一小部分にのみ動いてゐて、その國の生活者の大部分が、自己の表現慾に對して全く麻痺してゐるならば、その國の文化は病的であり、半死状態である。斯様な國に於て、若し藝術的作品がなされたとしても、それは模造か、移植かに終る。なぜなれば、その國自身の生きた生命の血は動き流れてゐないが故に、一小部分に咲き出

た藝術の花は、不斷の精氣を大地の中より攝取し、大地そのものゝ元氣の不斷の發露の口となることは出來得ないからである。

それ故藝術家は技巧を他に學び、畫家はテクニックをのみ喜び、文藝家は描寫論を何よりも尊重し、そのテクニックの優れてゐるのを誇り、その描寫技巧の他に比して劣らざるを頼みとするより他に、藝術の據處はなくなつてしまふ。(藝術が表現形式の美にあるといふことは、斯くの如き部分的表現技巧の場合にはいふ可きではない。)而て、この場合多數者は、その藝術家の投げ與ふる作品をたゞ好きものに思ひ、自己の生命と關係あらうが、なからうが、その自覺なくして愛好するが如くではあるが、實はそれを玩弄してゐる結果に終る。若しこの場合、思想家にして、單に抽象原理の解説か、或は部分的論争のみ重んじてゐるならば、この一小部分に擧げられた波が、直ちに全面に及ぶことは困難である。半身以上の不隨状態にある國にあつては、この部分的の

波のみをもつて、全體を喚起せんと望むのは、オワシスに湧く小流をもつて、全砂漠を潤ほさんと望むより困難である。

日本の明治維新の改革が、我々に新たなる呼吸をなさしめた事は事實である。併しそれとても部分的である。なほ大多数者は因襲の重みの下に喘いでゐる。若くは悦んで因襲の幃の陰にかくれてゐる。たゞ異つたものがあるとするならば、表面生活上の様式、口から發せらるゝ言語の響きのみである。中心は動じない。上だけのした水面は、流動の勢になり得ない。悪くすれば復び凍結してしまふ。斯る時代を表現するものは、いつも移植か、模倣かである。例へば、中央停車場の前に作られつゝある角型の幾つかの建物と、現代を代表すると稱せらるゝ或る神殿とを比較して見るがよい。あの兩者の間に如何なる共通性が發見せらるゝであらうか。我々はそのいづれかに、新時代の力を、精氣を、向上を、堅實を、自由を、共存感を見出すであらうか。

我々のものであり、我々の感じであり、我々の表現であると、何人が感ずるであらうか。一つは他邦からの移植であり、他は古代の模造である。表面上の協力、材料の蒐集、それだけでは、眞の中心の表現はなされない。輕薄なる寫實藝術が遂に當代の欲來を充たし得ざると同じことである。「藝術か、それどころではない。國家の急務はほかにある」といふ連中が集つて、何度改革をしたところが、眞の精氣は大地から發しはしない。かくして藝術と實際生活とは、或る變動を経ない限り、この國では永く隔絶したまゝでつゞいて行くであらう。

ユイサルエヴ
 巴里から二時間あまり、電車によつても、汽車によつても、或はセエヌの岸を、或は樹のこんもり茂つた濃緑の丘の間を、通じてゐる道は、我々をヴェルサイユへとつれて行く。

こゝは十七世紀中葉から、十八世紀の末まで、約百五十年間の時の歩み、統一綜合より分解離散への相^{すがた}、中央集權と個人主權と、人為文明と自然本能と、集注と解放とを次第に示す、生きた歴史の集團である。

第一に天然の完全に保存せられてゐる森林が人をひきつける。それは十七世紀の初めにルイ十三世を屢々獵に誘ひ出した同じ森林である。この森林の誘惑がルイ王をして此處にさゝやかな獵の休み場處を作らしめた。ルイ王は獵に出る度毎に、少數の宮人等と四五日をその小さな休息所に過ごすを常とした。

やがて、ルイ十四世がこの森林へ獵に來たのは、千六百五十一年である。天然の誘惑は前王と同じく、この豪華な王をもすつかり魅してしまつた。併しルイ十四世に於ては、前王の遺したさゝやかな休息所では満足せられなかつた。この「太陽王」は、その自己を引きつける天然物の中に、當代の有ゆる力を籠めた宮殿を作り出だしたい要求に捉へられた。自然の中に支配權を置きたい要求に捉へられた。千六百六十一年に建造の命令は出された。

求に捉へられた。自然の中に支配權を置きたい要求に捉へられた。千六百六十一年に建造の命令は出された。

マンサアルが、ル・ヴオが、招ばれた。やがて佛蘭西庭園術の始組ル・ノオトルが、水路の技術家フランシヌが、畫家のル・プランが、この協技合作の仕事に集められた。ルイ王はこの工事の進歩をもどかしく思つて、屢々自身やつて來ては督促した。ルイ王を通じて當代が求めてゐた、有ゆる方面の統一綜合の仕事を手助けしてゐたコルベールも、この王の焦心には時々反抗せずにはゐられなかつた。

やがて、總ての配置がほど出來た。森林の中に水路が縦横に設けられ、大きな水盤が、高い噴水が到處に現はれた。その水面からはアポロンが海馬に御して現はれた。ドラゴンが跳つた、ネプテユヌが出現した。

これ等に對して一段高く、白大理石の階段の上に、普通ルネサンス式といはるゝ宮

殿が、兩翼を張つて、見おろすやうに輝きだした。無数の黄橙樹が高い薫りを空中に放ち、果しなくつゞく暗黒色の森林が、頭を垂れて、この君臨者の前に順従な姿を呈した。

ルイ王はまだ十分出来上らない宮殿の中で、早速大祝宴を開いた。それが八日間もつゞいた。昨日まで、鳥の聲と、蟬の聲とのほかは聞かれなかつた森林の隅々、藪蔭からは、噴泉の音と、樂の音とが起つた。時は九月であつた。秋の早い中央フランスのヴェルサイユの森は、いつもならば、木の葉が黄ばみ落ちて、スカンヂディナブの北地から、歐洲の大陸の空を横切つて、アフリカ大陸の北海岸、若しくはナイルの海岸へ冬の宿りを求めて行く渡鳥の足どまりとなるべきであるが、音樂の響と、歡喜の人聲とにさまたげられて、その鳥どもは、豫定の企てを變更せずにはゐられなかつた。

宮殿の内部裝飾は徐々に出来上つた。三日間になすべきものを、王は、「一日になせし

と命じ、總ての方面に遅延をゆるさなかつた。ロココ式の飾りがル・ブランの手で着々なされて行つた。特に王が獎勵して、ル・ブランを主宰者としたコブラン學校の織物はこの宮殿の内部を飾るには役立つた。

ル・ウオの建てた兩樓の間へ、王はマンサアルをして廣大な鏡ミラルの間を造らせた。その天井には、王自身の歴史畫三十を、ル・ブランをして描かしめ、彫刻をした黄金の額縁に入れしめ、その一つ一つに、ポアロオと、ラシイヌの説明文が彫りつけられた。「平和の室」が出来た。「戰爭の室」がつけられた。ヴェニヌの室、ディアヌの室、マルスの室、メルキュールの室、アポロンの室、果しなき豊富と、統一とが次第に形をとつて行つた。王の居室、女皇の居室、ルイ王は徐々に出来て來るのをまち切れないうで、千六百六十六年に、此處へ移つて、ルウブル宮をば多く顧みなくなつた。コルベエルは、王がヴェルサイユのみ熱中してゐるのを、一つの不幸だとまで考へはじめた。

「如何なる人知らぬ暗き中に、運命は彼を生れしめようとも、世人は、彼を見ては、支配者たるを認めずにはゐられなかつたらう」と言はるゝルイ王、「萬人がみな彼を羨しいと思つた。少し抜け上つた額、筋の通つた長い鼻、圓やかな頬、唇の出た顎のまゝ、それ等が重味のある、はつきりした彼の横顔を描き出した。褐色の眼の中には柔さしさと嚴めしさがまじり、その態度には、優美とおごそかさがあつた。美しい威嚴と、氣高い様子とは人並みた身長を大きく見せた。總てこれ等の様子が人をひきつける魅力と、馴々しくさせない眞面目さを持つてゐた」といはるゝこの王は、華かさが好きでありながら、何處かに取りしづめた靜けさ、或は寂しさを持つてゐた。

彼はヴェルサイユで、自分の居室で食事をする時、その室の中央の窓の前に据ゑた四角な小さな食卓の上で、いつも唯一人で食事をした。所謂「プティ・クウヴェル」で食事をした。決して女皇とも共にしなかつた。

彼が嘗てモリエルとだけは共に、そこで食事をしたとか、しなかつたとかいふ事が問題になつてゐる。どつちとも解らない、どちらでもよろしい。少くも、サン・シモンサン・シモンの「ルイ王宮内の追憶」では否定の方であるらしい。兎に角、彼はそれほど、合事時は孤獨を求めた。たゞその場合でも、彼は遠くの方で奏させる音楽だけには、ぢつと聴き入つてゐた。

ルイ王は有ゆる藝術に理解をもつてゐたと言はないが、寧ろ、理解あるやうな態度はとらずにはゐられなかつたといふべきである。それは時代の要求である。王を中心機關として、當代は有ゆる方面に藝術表現を求めてゐたのである。この機關のある方が、當時に於ては容易にその表現慾を充たすことが出来たのである。王が個人的にどれだけ、モリエル等の藝術を批評し、鑑賞し得たかは、別問題として、當代の必然の要求としては、眞の藝術家を、自分等を代表的に表現し得る藝術家を、生かして行きた

いのであつた。王はその要求を充たす役目は十分にした。有ゆる藝術家を保護し、奨励し、尊重し、十分の才能を伸ばさしめた。即ち藝術の中心機關たる役目はほど遺憾なく果したと言つてさしつかへなからう。

彼は自分の光榮をますために、光榮をかざるために、ヴェルサイユを造營した。自分と國家が一致したものであると考へる如く、政治も、財政も、更に藝術も、自分と共に伸び、自分と共に榮えるものと考へた。統一綜合の中心が自分にあると思つた。太陽が人間の生命の源泉である如く、自分は當代の生命の源泉であると思へ、太陽王と自分でも思つてゐたに違ひない。

ヴェルサイユを造るために、當時の人々は巨額の負擔を受けて苦んだに違ひない。併し王を通じて、ヴェルサイユを造らしめた當代の人々の藝術的表現慾の効果は、今日のフランスにとつては決して不幸なものではない。藝術が正當なる所有者の手に歸した

今日に於ては、現代人は、その祖先がその藝術を造り出すためにくるしんだ負擔を思ふと同時に、かくまでにしても、その藝術を造りいださずにはゐられなかつた當代の表現慾の盛んであつたことを思ひ、その藝術の効果に感謝を覺えるであらう。この場合、ルイ王その人の歴史たぞはどうでもよい。彼の榮華の夢がつゞかうが、破れやうが、それは問題でない。

おそらく彼が一人、この王宮の中央で、窓に向つて食事をしてゐた時、彼は自分を通じて湧き上つて來る、押へても、押へきれない當代の表現慾の盛んなのを覺えたであらう。而して我ながら不思議な感じを抱いたであらう。彼は、不知不識の間に、この慾望の發露機關と身をなしてゐたのである。その點までは背かれる。併し、彼は、古來の同じ地位にあつたものが陥つた同じ過誤に陥つてしまつた。自我中心の放縱はその結果である。

總の藝術の中で、ルイ王自身が、個人的に最も愛好したのは、音樂であつた。ヴェルサイ宮の最後に出來上つた會堂シヤペルには、フランドの宗教音樂がつねに響いてゐた。ルイ王は、眠るにも、朝起きるにも、モンテーニユの幼年時のやうに、音樂に伴はれた。外出にも、市街の行列にも、野行にも、獵にも、いつも樂隊が伴つた。大饗宴には勿論、夜會にも、禮拜にも、一人食事する時にも、それのないことはなかつた。時には食事の後で、近親にオペラの一節を唱はしめ、自身でも歌つた。「ルイ王は音樂の中に生活した。」

78 彼が愛好し、尊重したのは、特に佛蘭西オペラの創設者ルユイである。ルユイは伊太利のオペラに對抗して、初めて佛蘭西へ古代の踊りと、當代の悲劇とを音樂に伴はせてオペラを作りいだした始祖である。ルユイの樂はいつもヴェルサイユ宮中に鳴りをやめなかつた。ルユイのオペラへは、當時の貴族が出場して公衆の前で歌ひ手と

79 なることがゆるされた。王は、笛とクラブサンとの名手であり、ギターにいたつては特に優れてゐた。時には自身で小曲を作つたが、いつもルユイに師事してゐた。

ルイ王のもとで、各方面の仕事の組織を立てた人々は、みな同類型の人物である。コルペルをはじめ、ルブランでも、ルユイでも、更にモリエルでも、綜合、施設、創始の方は共通である。ルブラン以下、自身が藝術家であつて、同時に仕事の組織者である。獨特性と共通性とを備へた人々である。即ち時代の代表者である。デカルトの哲學でも、ボッシュエの雄辯でも、パスカルの宗教でも、ボアロオの詩論でも、ラ・フォンテヌの人生自然詩でも、個人性の發揮と共に當代を代表し、一定の法則秩序を、思考の上に、精神の働きの上に、表現法の上に明示してゐる。仕事の始めを示すと同時に完成を見せてゐる。ルイ王とても同型の人物の一人であつたにすぎない。

ヴェルサイユは、年を逐うて完成せられた。「ルイ十四世は、何物でも見たまゝの状

態に残しておくことを好まなかつた。彼はことに天然の形を、意の如く是正することを好んだ。天然の森林が宮殿内と同じやうに支配せられた。各藝術家の手になつた立像が、群像が、青銅の大盤が、大理石の圓柱の列が、自然を背景とし、自然を棲家として据ゑつけられた。水の廣場が出来上つた。有ゆる水路に、一日十二時間づゝ、水の流るゝことが命ぜられた、その水は従順に、命のまゝに、高い貯溜所へ導かれて、王の好みのまゝに、林間で噴泉の樂を奏せずにはゐられなかつた。

夕暮からかけてルイは、水路に浮べられたコンドラの中に座をしめた。彼の後には、他の船にリュリーの率ゐる一隊の樂人がヴィオロンを奏しながらつゞいた。暮方の森の静けさの中を、水面にひゞく樂の音に聴き入りながら、王は森の奥まで進んだ。その時に飾火が一時に、無数の水路の兩岸に輝き出した。水路の交叉點で振り返つて見ると、左手に、廣い水面から、海若ネプチュームの車がトリトン等に取り巻かれて跳り上り、右手

に、アポロンが神々に守られて同じく陸上へ迫らうとしてゐる。而して、その奥に、巨大な宮殿が、闇を背景として、全體が飾火に輝いて、森の闇に浮び上つた。

庭園がまた殿内と同じく飾られた。ルイが愛した花は、黄橙樹オウゴンであり、柘榴樹グランドニエであり、スペインのジャスマンであり、オランダのチュリップなどであつた。彼は國外へ出た時でも、この庭園へ飾る花のことは忘れなかつた。この花園と水路と森林とが室内と同じく、劇場に用ひられた。喜劇も、悲劇も、オペラもこゝで演ぜられた。千六百七十四年の秋には、特にコルネイユの週間を設けて、シンナ、オラス以下の六篇をこの庭園で演出せしめた。その當代の人々から忘れられかゝつてゐた老劇詩人は、その報を得て歡喜した。ラシイヌとボアロオとを呼んで共に語るを好んだのも此處であつた。ヴェルサイユの内外、隅々に到るまでルイ王の呼吸の通つてゐない場處はなかつた。「彼の家、彼の庭園を離れてゐる時、彼はいつもそれを思つてゐた」。そして彼がこの

仕事を仕上げるために、當代に拂はしめた犠牲は莫大なものであつた。

ルイ王は、サン・ジェルマンの宮殿を増築せしめ、ルウブル宮を擴張し、ヴェルサイユを造營し、一つ一つの製作を仕上げて行くのに興味を感じてゐるものゝ如く、ヴェルサイユの建造と共に、それと程遠からぬ處にトリアノン宮の建設を命じた。それは千六百七十年であつた。ルイ王の晩年は、多くこの宮殿内に過ごされた。彼は此處を疲勞を休め、靜養をとる場處に當てゝゐた。

トリアノンはおそらく、佛蘭西に於けるこの種の建築の中で最も美しい、最も安らかな感じを與ふる建物であらう。

82 ヴェルサイユは高大で嚴めしく、ルウブルほどではないが、上から押へる重苦しきがある。殊に巴里に向つた方面、アヴニウ・ドゥ・パリから眺めたヴェルサイユは、暗く苦し

83 く、引きしめすぎて、冷たく、單調で、官廳的な感じ、これに向へば、何とかして破壊して見たいやうな感じが、不知不識に起つて來る。

ヴェルサイユの美は背面にある。森林に臨んだ、自然に對した方面にある。階調制御の美である。人間が自然を征服して行く力の現れである。けれど、宮殿に近い處では、ルイ王のあまりに逸樂的な、我儘であつた趣味が浮んでゐる。

ルイは、この統御と、この逸樂とに疲れて、もつと安易な、もつと平明な住處を求めた。トリアノンは、日本の古代の神社に見るやうな、春日神社の廻廊にでも見るやうな、明るい、平かな、安かな、平家造りの、純白な大理石の建物である。

暮近き森の空氣がしつとりとして、夜の來る前の短い間の爽かさが、人の皮膚に迫るとき、西の空から反映する夕焼が、この小さな、純白な宮殿を、ばら色に染めい出す。

森の方へ降る石段に倚りかゝつて、もう散歩者もなくなった夕方の静けさの中に身をひたしてゐると、眼前に浮ぶ薔薇色の宮殿は、昨日たてられたばかりのやうに鮮かで、圓柱の廻廊から、兩翼の張り出しから、石階から、建物全體から、一つの動波が空中へ立ちのぼるのを覺える。トリアン全體が一つの大きな樂器である。それを奏するのは目に見えぬ時の手であり、自然の樂手である。

日中のあまり明るい、人聲の喧騒の中では、この樂の音は消されてしまひ、その動波が亂される。自然の呼吸が人間に近く感ぜらるゝ時、人間が身を委ねて自然の懷に眠らうとする時、この白い樂器は、自然の手によつて奏し出されるのである。

84 おそらくルイ十四世も、この宮殿の内で、一人で食事をしてゐた時、夕方近く、この宮殿そのものが立てる樂の音を耳にしてゐたことであらう。いな、寧ろその樂の音を求めて、この宮殿の内へ移り住んだのであらう。

彼が疲勞したのは、統御そのものゝ疲勞を意味する。彼が休養を求めたのは、ルイといふ一個人になりたい要求の動きである。引きしめ、押へ付ける力が緩んで來た。緩まずにはゐられなくなつた。もつと自然な、もつとありのまゝな生活がしたくなつた。もつと素直な、誘惑にばかりかゝらない生活がしたくなつた。

彼がトリアンへ多く引き籠るやうになつた時、時代は既に十七世紀を過ぎて、十八世紀にはいつてゐた。彼の在位中、既にジャン・ジャック・ルウソオは呱呱の聲をあげてゐた。ヴォルテールは既に二十歳に達してゐた。彼が在位七十二年間、神權の地上への代表の如く、統御と抑制との權化の如く、その最終日まで自分を考へてゐた間に、時代は移つた。彼自身の心中にさへ裏切り者が出て來た。ヴェルサイユの構成の中にさへ、その豫見が影をさしてゐる。その謀反者の具體化せられたのが即ちトリアン宮である。

これは既に革命への一步の近よりである。結合集注より、分散解放への第一の歩み

である。如何なる感化力の中でも、最も力強き時代の力は、自己妄想に捉はれてゐたルイ王をも逃がしはしなかつた。彼は不知不識の間に自分が全力をこめたヴェルサイユが厭はしくなつた。もつと簡易な住家が欲しくなつた。もつと自然に近い居住を求めた。大地により近い、風の吹き抜けて行く、日光の自由に射す住家が何よりうれしくなつた。

ヴェルサイユは統御の力を、トリアノンには自然へ歩み寄つた調和の美を示す。ルイ十五世はその在位の後半は、屢々こゝへ來てゐた。

併し時代の歩は急速である。一度び傾斜を降りはじめては、行く處まで行きつかずばやまない。トリアノン宮でもまだ自由な、自然の呼吸をするには、あまり整齊の姿がありすぎる。もつと容易な、もつと氣輕な、生活を求めたい心が次第に動いて來る。

ルイ十五世は、一層ヴェルサイユから遠ざかつた森の中に、一層手輕な休息所を求めた。先王の歩み着いた處より、もつと遠くへ歩み出したくなつた。

彼は小トリアノンを建造した。建造といふよりは、たゞ建てたといつた方がよい。

これは建築家ガブリエルの設計ではあるが、間敷の七つしかない小さな家である。現在ならば何處でも見られる小家である。千七百六十八年に彼は初めて、其處で食事をした。七十四年に彼はこゝで最後の病氣に罹つた。

造庭の技術に於ては十八世紀の初めから、時代の推移の相がはつきり現はれてゐた。ル・ノオトルの組織に反對した英國式の庭園が次第に勢を得て來た。「自然全體が庭園である。そして、模すべくば、その形、その生成、その線、その色彩の眞實をこそ眞似るべきである」。やがてルウソオの鼓吹した自然が、徐々に庭園内に取り入れられて來た。ヴェルサイユの庭園すら次第に改造せられずにはゐられなくなつた。

ルイ十六世が小トリアノンを女皇、マリイアントワネットに與へて以來、女皇はこゝに引籠つた。小さな幾つかの田舎家が出來た。茅葺き屋根の水車屋も、粉挽舎も、牛乳をしぼる處も、麥畑も、水溜りも、すべて自然のままの小村が出來た。マリイアントワネットは、その小屋で、エリザベット夫人その他の友達や、また自分の子供等と、麥わら帽子をかぶり、農婦の姿で、牛乳を搾り、麥粉を挽いて日を暮らした。それが豪華の末の一種の虚飾だといふ人があつても、また、その村落生活が一種のオペラ・コミックの場面であつたといふ人があつたにせよ、少くも、彼女をしてさうさせずにはゐられなくなつた時の力は、何としても否定することは出來ない。

ヴェルサイユから大トリアノンへ、大トリアノンから小トリアノンへ、更にこの小村へ、人間の制御力の頂上からこの大地の面へ、次第に歩みを移して來るならば、時と共に現はるゝ人間の要求の推移の跡は明瞭に讀むことが出来る。

併し、この小村の中まで逃げこんで來て、農婦生活をよそほつてゐた女皇も、氣の弱い王も、此處ではまだ安住の地は得られなかつた。更に最う一步すゝめて、群集の中へ、多數者の中へ引き入れられずにはゐられなかつた。極度に征服せられた自然は、一時の宿り場を、隠れ家を、提供はしたが、終の安住の地を彼等に與へはしなかつた。千六百六十一年から千七百九十三年まで、山の頂上より裾野にいたるまでおろし來る太い歴史の一線の上に様々な人物が跳り、その人物が演じた様々な役目の具體的な表現は、ヴェルサイユを包む廣い森林の中に、永久の記念として保存せられてゐる。

此處では、千七百八十三年に、英國がアメリカ合衆國の獨立を認むる條約が結ばれた。こゝでは、千八百七十一年に獨逸皇帝が戴冠式を行つた。更にこゝでは、千九百十九年に世界大戰の平和條約が調印せられた。併しそれ等のことはヴェルサイユそのものゝ歴史とは別に關係はない。いづれ、何處かでなされたことであらう。人がたゞ其

處を一時借りたいといふだけのことである。ヴェルサイユの存在とは毫も交渉はない。千八百〇二年（ルイ十六世の最後より九年隔つたばかり）に、シャトウブリアンは、「ジェニイ・ドゥ・クリスティアニスム」の中でヴェルサイユを説いてゐる。

「ヴェルサイユの内にこそ、佛蘭西の宗教時代の壯麗さが集められてゐる。一世紀が辛うじて経過した。そして、祝宴の響の鳴り渡つてゐた叢林は、最早や蟬や、ロシイニョルの聲ならでは生氣を興へない。一つの大きな都市のやうなこの宮殿そのものゝ、雲の中へ登るとも思はるゝこれ等の大理石の階段、これ等の立像、これ等の水盤、これ等の森、今は、或は崩解し、或は昔で覆はれ、或は乾きはて、或は倒されてゐる。けれど、この王者等の住居は今ほどに壯麗に、今ほどに靜寂であつたことは嘗てない。以前は、この場所では、總てのものが空寂であつた。この宮殿がその不幸な高大さをとらない以前の小さなものは、ルイ十四世の宏大な住居の中で、いかにも氣安げに見える

91
てゐた。

時が權勢の上に打撃を加へた時、或る立派な名前がその權勢の断片に結び付けられ、その断片を覆ふ。若し戦士の立派な卑劣さが、今日、ヴェルサイユ内で、宮廷の莊嚴さの後を受け継ぎでもしようならば、若し奇蹟や、殉教者などの額面が、冒瀆の繪畫に置きかへられでもするならば、ルイ十四世の幻影はそれに對して憤らないであらうか。彼は宗教や、藝術や、軍隊を輝かした。彼の宮殿の舊蹟が、軍隊や、藝術や、宗教やの廢墟の隠れ家に役立つといふのはよいことである」と。

ヴェルサイユ

今ではヴェルサイユの大噴水も一年に一度だけしかなされぬ。年中見物人の足はたえない。森林では舊時の如く鳥も長途の旅の宿りを求め、蟬時雨が夏の訪問者の眠りを誘ひ、トリアノンの茅舎の屋敷には、女皇の遊び場處であらうが、なからうが、いちいつの花が咲き、蔓草は白大理の階段に心易げに爬ひ上り、その實を振りこぼす。

總てのものが當然の状態に歸した。すべての藝術が當然の所有者の手に歸した。何人が建てたのであらうとも、現代人の祖先等であらうとも、その中の一人にルイ十四世が加つたのであらうとも、今日はその鑑賞は萬人の思ひのまゝに委かされてゐる。ヴェルサイユを造るために受けた、また忍んだ苦しみは、不法でもあり、不幸でもあつた。けれど、時は、その不法を正すために、その不幸に酬ゆるために、後人をして、その正當の所有者、その正當の鑑賞者たらしめたのであらう。總ては時が刻んで行く地上の足跡である。その足跡の最もあらはな、明なものとして、暗黒な森林に對して、銀灰色のヴェルサイユは建つてゐるのである。

ポオル・ロワイヤル訪問記

イール・ドゥフランスの初夏の空は淡青に澄んで、麥の穂波は地平線まで敷きのべ、巴里廓外の森林には若葉のかをりが、鈴掛け鳩の鳴く音と共に、人を奥へ奥へと導き入れずにはおかなくなつた。

シュヴルウズの森の入口には、小高い丘の上に、封建時代のシュヴルウズ侯の苔むした城塞が聳えてゐた。二つの高塔と、圓形のドンジョンとが荒れ果てた周圍と、目醒めるやうに大きく、眞白に咲き出たマグノリアの花樹とに對して、年經た沈黙をまもつて、不思議に立つてゐた。

眞白な路は、この黙した古城の下を、廣い平野の方から、シュヴルウズの町へと、我

我に乗せた旅客馬車を輾らせた。佛蘭西の田舎町の何處にでも見る小さな鋪石路の上を、この馬車は、かたこと走りながら我々を町中のとある旅客の前へ連れて行つた。

ボオル・ロワイヤルへの路は、この町から徒歩で森林の中を十キロメートルも横切るか、でなければ、森の周圍を馬車で繞つて行くかであつた。いづれにしても先方には泊るべき家がないので、その日の中に往復しなければならなかつた。それには時間が少し不足した。我々は森の中でも散歩して、その夜はこの町で過すよりほかに途はなかつた。

佛蘭西人を母に持ち、國籍上からはベルジューであつた年若い詩人のルシアン・モレアは案内者のかたちで私を此處へつれて來たのであつた。彼は肩巾の廣い、頭髮の黒い、大きな、そして眞實の光りをたゞへた眼の持主であつた。午後の光りの射し交はす若葉の森の中を、彼はとめどなく喋りながら私とならんで歩いた。

彼は戦争の當初、ソルボンヌの學生として第一に召集せられて戦争へ出た。ソワソンの激戦で傷ついて後方へ送られた。この若い自由主義者は、決して獨逸人を憎みはしなかつた。彼によれば、獨逸人の白耳義に於ける暴行は非常な誇張をもつて報ぜられてゐることであつた。彼はワグネルには熱情的の尊崇をさゞげてゐた。彼のお喋りがとだえると、タンホイザーの一節が低いけれど力強く、彼の口から流れ出た。彼はマアテルリンクをば好まなかつた。そのくせ、彼は少年時ルブラン夫人の膝へのせられて遊んだこともある。彼の好きなのはヴェルアランであつた。この國民詩人と共に彼も祖國の纒かに残存した土地へ行つて講演に熱辯をふるつてゐた。併し彼が、眞のフラマンの血を、フラマンの精神を示してゐる詩人として推賞したのは、シャルル・ヴァン・レルベルグである。レルベルグは臆病で、人の前ではろくに物も言へなかつた。彼は特に女性に對しては恐れすらも感じた。彼は人をさけて、いつもぢつと何ものにか

聽入つてゐるやうにしてゐた。フラマンの大地はこの不思議な詩人とその精氣の發露機關としたのであると、モレアは語つてゐた。

夕方の涼氣が森の中に漂ひ、リラの花のうす紫が微かに樹下の暗い中に浮び出た。鳩の鳴く音が遠くなつて、廣い、廣い、この潤葉樹林には、我々二人よりほかに散步者の姿も見えなくなつた。

翌朝早く我々は、一頭馬車を雇つて、この森に沿うて走らせて行つた。小暗い若葉の森を目醒まして、眞赤なコクリコの咲き充ちてゐる牧場と、目路の果てまでつゞいてゐる麥の廣野の上へと渡つて行く朝の風は、冷たいまでに爽快であつた。

次第に後方へ去つて行く森を離れると、昨日と同じ淡青の空が地平線上に垂下して、我々の前に展けた。「フランスの青空は、神の視力の如くいかめしく、おごそかなものでは決してない。むしろ人間の眼の純き愛求である。そして、その曇る時は、反省をま

ねき、倦怠はよべど、怒りをば招致しない。」とアンドレシュアレスは言つてゐるが、この空を前にし、その空へ向つて走つて行くやうな一筋の白い路の上に、時々、松ペルリがどこからともなく舞ひおりて、馬車が近づいて行つても飛び立たうともしない。

「ポオル・ロワイヤルに近づくにつれて、光景は一層寂しくなる。最早地にひれ伏す小村のほかに目にうつるものはない。荒い丘陵が四邊を領じ、そして地平線は、總の偉大なるものがしかあるやうに、いかめしくまた悲しげに後退する」と、おなじくシュアレスは言つてゐるが、麥の廣野の左手に暗い丘陵の起伏が見えて、そのさきの方に、麥の穂波の上に黒い森林の頂きだけが大きな島のやうに浮んで來た。ポオル・ロワイヤルの谿である。

草の深い、木のこんもり茂つた小徑を、爪先き下りにおいて行くと、小流の音がきこえ、鳥の鳴く音が澄んで、次第に別天地へはいつたやうな氣のするポオル・ロワイ

ヤルの僧堂ズイの跡へと出た。此處は佛蘭西に於ける最も舊き聖地の一つであり、嘆美的巡禮者の訪問の對象地の一つである。

此の僧院は十三世紀の初頭に少數の尼僧のために建てられたものであり、當時の貴族等の保護のもとに維持され、殊に聖王ルイの掩護は、その存在を最も固きものにしたのであつた。ついで、法王オノレ三世がこの僧院に聖餐式舉行の特權を與へたことは、更に此處をして當代の最も尊き場所の一つとしたのであつた。佛蘭西の十三世紀といふ中世紀に於ける宗教の精華時代は、今日に於て、國內到る處に見らるゝ如き顯著な足跡の一つを此處にもとどめたのであつた。

十六世紀の末には、此處も他の例にもれず一時衰頹した。ルネサンスの自由思想は此處にもまたその流れの痕跡を見せた。やがて「大世紀」が來た。そして有ゆる文明要素の醗酵醸成せられたなかに、宗教もまたその最も力強い働きをした一つであつた。

ポオル・ロワイヤルはこの時勢と共に生き還つた。

マリイ・アンジェリック女教主が、特にその弟の大アルノオが、此幽居に籠つて以來、ポオル・ロワイヤルは佛蘭西に於けるジャンセニスムの源泉地となつた。修道院が建てられ、教養場が設けられ、修道の女性等の籠もる者、特に選ばれたる少年者等の此處に送らるゝものが多數にのぼつた。其處では、コルネリイユス・ジャンサン(千五百八十五年)が聖オギュスタンの教理に基いて、神の恩恵と人間の自由選擇との調和より立てた新教義が、嚴正綿密なる手段によつて教へられた。教授と訓練とが徹底的に行はれた。

このジャンセニスムの嚴正なる新教義を受けた年若い教徒の中に、我々は天才悲劇作家ジャン・ラシイヌの少年姿を見出し、この僧院の一隅に、冥想と論戰と敬虔な祈禱の生活を送つてゐた哲人パスカルの晩年の姿を見出すのである。そして、この兩者を通じてこそ、我々は、當代の徹底的理性批判と神祕的宗教情緒との結合を、更に白熱に燃ゆ

る熱情の淨化洗煉、抑制馴致とを知るのである。藝術上より見れば、ポオル・ロワイヤルはこの兩者を出すために盛んになり、この兩者を通じて、その教義の具體化、不朽化を求めたのである。されば、ランソン教授を言はしむれば、「ポオル・ロワイヤルの文學上の有ゆる力、有ゆる光榮は、つまり、若し人がラシイヌを暫く別におくならば、パスカルの中に堆積せらる。彼は、我々に對して、彼の天才の廣大な獨創性が擴大したジャンセニストの教理の理智的・道德的の最高を代表するのである。」

パスカルのポオル・ロワイヤルへ引籠つたのは千六百五十四年即ち彼の三十一歳の時であつた。それから彼の三十九歳にて死んだ千六百六十二年まで引つゞいて此處にゐたのであつた。十六歳で既にその數學の才能でデカルトに美望を起さしめたといはれ、その「空間論」と、「幾何學精神」とで、その理性の至高力を發揮し、死の際に至る

まで時々科學的發見がその頭腦に往々してゐたこの科學の天才が宗教の光に接したのは、最初ルウアンで、氷の上で彼の父親が負傷した時、ジャンセニウス、サン・シラ、アルノオ等の訪問を受けた時に初まり、次ぎには、ヌウリイの橋上からセエヌの流れへ馬車と共に落ちて危く救はれた時にその機を深めた。その時以來、彼は理性以外の或る力を身に感じた。併しその力は彼にとつては理性に反するものではなく、寧ろそれを深めもし、強めもし、やがてはそれを抱擁するものでもあつた。

またその時以來、彼はいつも自分の足許に人生の「苦き深淵」の湧き返るのを感じた、自分の臥床の下にその深淵のまさまざと渦まくのを視た。パスカルの嘆賞者、哲學者で詩人であるシュレイ・プリュドムはパスカルのこの心理を詩にうたひ、その心理をとめて「パスカルパスカルによれる眞の宗教」を著はしてゐる。

この人生の「苦き深淵」こそは、パスカルをして更に一層ジャンセニスムの教義に近

寄らしめた。彼の一歳だけ年上の姉ジルベルトはおだやかな、併し固い決心をもつた信者であり、二歳年下の妹のジャクリヌこそは一層熱したる、烈しき想像力に充てる心のジャンセニストであつた。後者は千六百五十二年以來既に世俗生活をすて、ポオル・ロワイヤルに籠り、兄が來り投ずるのを待つてゐた。この妹の勢力こそはパスカルの實生活の上に大きな影響を及ぼした。而してその姉ジルベルトこそはパスカルの死後間もなく弟の生涯を書き綴つたのであつた。

この賢明にして愛の濃やかな、心のゆきとどいた姉の手になつたパスカルのこの傳記から、柔しさと、確さともつて、一人の哲人がとめて行つた途を、その心理を、明らかに示してゐるものは少い。パスカルについての研究書にいたつては、ヴェルテール、クウゼンを初めとして、現代のブウトルウ、ヴィクトル・ジロオ或はストロオスキイ教授の書物に到るまで、傑れた著書は擧ぐるに暇ないほどであるが、その傳記の要を

得て明晰なるは、このジルベルト・パスカルのものにしくはない。この傳記だけを見ても、いかに彼女が佛蘭西の古典時代に生れた、明晰な靈の所有者であつたかは知られる。パスカルが、その姪の眼病に罹つてゐたのが、ポオル・ロワイヤルで、クリストの「荊の冠」の一片として保存せられてゐた聖遺物に手を觸れたので直ちに全快したのを見て、その奇蹟に感動したといふマルグリットこそはこの姉の娘である。妹のジャクリヌは兄の死ぬ一年前にポール・ロワイヤルで死んだ。

若くして理性に目醒め、科學に天分を發揮したパスカルが、第一に求めたものは事象を貫く確實性であつた。彼はそれを先進の哲學者等の所見の中に、殊にエピクテートに、モンテーニュに求めた。彼は同時に幸福を求めた。彼はそれを科學の中に、また現在生活の中にも搜した。一時、彼は現在生活の華かな中に享樂を求め、妹のジャクリヌの修道院へ急ぐのさへも止めた。併し彼の哲學も、科學も、現世の幸福も、彼を究極

へ導くことは出来なかつた。不可解な神祕は、事變と共に、彼を神の前へ投げ出さずにはおかなかつた。されば彼がポオル・ロワイヤルへ引籠つた時は、「學者であり、正純な人であつたが、神學者としては無であつた」。彼は端的に、純一に、理性の道を歩んで神に向つた。會堂エgliseの方則カノンをも知らねば、法王パプをも認めなかつた。彼はひたすらに神に走つた。彼はジャンセニストの中の最も端的なジャンセニストであつた。

當時、ジャンセニスムは、一方に、競争者であり、戦闘精神の盛んな、そして羅馬オルトドックスの防禦者をもつて自任してゐたジェズイットを相手にし、他方には、法王を、それを頂く宮廷官憲を、更にソルボンヌの教授連を相手に論戦しなければならなかつた。従つて、當時のポオル・ロワイヤルでは總てが緊張してゐた、修道の女性等とても殉道者の覺悟を持つてゐた。

パスカルはこの空氣の中で、大アルノオの依頼で、千六百五十六年の一月から翌年

の三月までに、十八通の書簡の形式をとつてジェズイット派攻撃の文を公にした。これが普通、「プロヴェンシアル」と呼ばれてゐる彼の宗教哲學である。なほ詳しくは、「ルイ・ドゥモンタルトが、その友人等の一人たる一地方人及び、ジェズイット教父達へ、その教父等の道德及び政治に關して書き送る書簡」と題するものである。

パスカルの「パンセ」(冥想錄)なるものは、彼の死後の出版である。これは、彼がその「クリスト教の解説」なる著作を仕遂げずして死んで行つた後に残つた断片である。ラシイはその「ポオル・ロワイヤル概史」のなかで、パスカルの死についてかういつてゐる。「彼は三十九歳に過ぎなかつた。けれど、いまだ若くはあつたが、彼の大きな業苦が、彼が不斷にいと高きことにのみ心を用ひてゐたことが、彼の心身を盡くさしめて、高齡にして死んだと言つてもさしつかへないほどであつた。彼は無神者に對して企てた一つの大著述を完成せずに残した。人々はその著作の断片が、彼の紙片のなかに散亂

してゐたのを見出した。そして、これが「パスカルの瞑想録」といふ名をもつて、公刊せられたのであつた。これ等の断片こそは、彼がそれを完成する時間を持ち得たならば、その完全な著作が持つたであらう價值と、宗教の宏大な眞實性が彼の心の働きの上へなした生々した印象とを判断せしめるに足りるのである。(ラシイヌ著、ポール・ロワイヤル) (ヤル概史、百五十五ページ)

これが所謂千六百七十年のポオル・ロワイヤル版といふのであるが、この版は却つて改削が杜撰であつて、眞のパスカルの手記に最も忠實なものとは言はれない。千八百四十二年ヴィクトル・クウザンがそれについての議論を初めて以來、幾多の改版が行はれた。

人間の理性は總てを知ることには出来ない、事象の外貌を判断し得るにとどまつて、確實には何も知られない。想像は人をあざむき、人々の意見は境遇年齢健康によつて種々雑多である。人は不幸と、無智とのなかに死んで行く。パスカルの思考のこの出發

點は、いかにもモンテーニュの出發點を思はしめる、ペシミスムである。けれど、ルネエサンス期の最後の代表者たるモンテーニュは人間の不幸を、弱點を、指示し啓示して冷たく笑ふ、時には楽しむやうにすら思はれる。しかるにパスカルは、常に我々と共にその不幸を苦しみ、悲しむ。彼はいつ「涙とため息ともて、隠れたる神を探し求むる人ならでは背くことが出来ない」と、彼がまさしくその最たる一人であつた。

人間は不幸である。けれど、「人間は己れが不幸なることを知つてゐる。されば人間は不幸である、彼が不幸なるが故に。けれどまた人間は十分に宏大である。彼がそれを知つてゐるが故に。」「人間は、自然のなかの最もか弱き一莖の蘆にすぎず、されど、この蘆は物を想ふ。」*“L'homme n'est qu'un roseau le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant”* の不思議な人間、この神秘的な人間の生活、パスカルのこの思考と共に、人はデカルトの「コジイト・エルゴ・スム」を思ひ出すであらう。けれど、バ

スカルによれば、デカルトは理性にのみ終始してゐた。「デカルトは無用で、不確である。」「我はデカルトに許すことが出来ぬ。彼は、その哲學全體のなかで、神なしで過ごし得ることを望んだでもあらう」。モンテーニュは初めて近代批評の門を開いて、人を宗教に近よらしめた。けれど、彼自身、神のなかに入ることをしなかつた。デカルトは近代理性の方式を律し、近代哲學を創設した。けれど、彼の哲學は神を繞つて建てられた、彼自身神の呼吸の中に生きたのではなかつた。パスカルはこの理性の道を通して、直ちに神の前へ出た。最早や生くるにも、死ぬるとも、神をば離れ得なかつた。

人間は不幸である。けれど人間は不思議なものである。この神祕の説明をば哲學はなし得ない、宗教のみが———クリスト教のみがなし得る。この信仰に達する手段は如何、この信仰のなかに浮び上るクリスト教の眞實性とは何であるか、これがパスカル

の「クリスト教の解説」の斷片、所謂「冥想録」が我々に示す、教義であり、體驗であり、生命である。

パスカルは極めて厳格な、科學的にまで厳格な性格を持つてゐた一面に、極めて微妙な感知性、感動性を備へてゐた。一點、一劃もゆるがせにしない數學的態度で、自他を批評する厳しさと確さを持ちながら、無限の青空の永久の沈黙に對しては、その恐ろしさに身を慄はせてゐる點などは、十九世紀末の詩人等の敏感さにも比すべきほどである。この厳格さと、この感動性とが彼の信仰をユニクなものにしたのであつた。

彼が自分の身を顧みず、他に對して注いだあゝい愛情の例證は、彼の姉のジルベルトが書いた傳記の中に數多くしてある。「自我とや、それは嫌はしきものである。」彼はその語の體驗を、常に病苦に惱まされてゐる中にも味つてゐた。最後の病の床に

« Moi, c'est hâssable »

横はつてゐる時ですら、彼は自分の病床を立ち出で、人のために席をつくつてやらずには居られなかつた。

ラシイヌがポオル・ロワイヤルへ送られたのは、千六百五十五年の十月であつた。即ちその時は、パスカルは既にその前年からこの僧院の一部へ来てゐたのであつた。けれど十六歳の少年であつたラシイヌは、他の少年等と共に修道と教養とにのみおはれてゐた。それ故、彼が十九歳で千六百五十八年の同じ十月に、此地を去るまで滞在してゐた三ヶ年間に、パスカルに逢ふ機會はなかつたやうである。

一人は此處を終焉の地として引き籠り、そして、両者が共に同時にこの谿で生棲してゐた間に、瞑想と推理のなかに「プロヴェンシアル」を書き、他は此處を一生の出発點として發足し、その三年間に、キリスト教の情緒と、古代美への憧れと、この谿合

の自然が與へた沈黙の印象とを胸にたゞんだのであつた。

ラシイヌは祖母が既にこの地へ引退いてゐた關係と、舊くから家族の間にポオル・ロワイヤルへの信仰が繋がれてゐたので、特殊な、便宜を持つた小さい學徒の一人としてこの地へ呼ばれたのであつた。この地の「小さな學校」なるものは、ジャンセニスムの教義に基いて、特に年少者等を訓練し、「善事に對する努力の準備」をなさしむるにあつた。人間の性は根本的に悪い。殊に小兒にはその悪さが現はれてゐる。これより救はれるは道德の訓練によつて、神の恩恵に接するやうにするよりほかに術はないといふのであつた。この小學徒等の數は五十人を定限とし、一人の教師が六人以上の生徒を受持たず、個々の生徒の素質に従つて教育し、教課もすべて徹底的に、解剖的であり、文法の根源を、論理の基脚を明かし、聖書の根本的説明を課し、殊に希臘文は總て原文を嚴格に讀ました。此處では、競争心を持ためしず、街學を禁じ、知識は

徹底的であつて、行爲は他に對して誇揚を絶対にゆるせず、生徒の間にも互の尊敬を
持たしめ、馴れ／＼しさを禁じ、チュトワイエすることすら出来なかつた。愛と尊敬と、
知識の徹底と、即ち淨化せられたる情緒と、洗煉せられたる理智との一致、これが、
所謂、ポオル・ロワイヤルの教育及びその教育法と呼ばれるものであつた。

かういふ教育の三ケ年間は、柔さしい性情と、微妙な感知性と、明徹した理性と、
燃えたつ熱情との持主、ジャン・ラシイヌの性格をつくり上げるのに大切な役目を演じ
たことは言ふまでもない。そして彼の悲劇の愛好者が、その作中に見出す、宗教感と
希臘美との一致、エレニスムとエプライスムとの共存は、この地の三年間が彼の胸中
に植ゑつけた若木の發達であつた。

愛くるしい、そして柔順な少年ラシイヌは此處で人々に好かれた。アモン神父は特
に彼を愛した。後年、彼は、自分が死後はアモン神父の墓の側へ葬れといつたほどに、

この人の愛の手は彼の心情をとらへてゐた。彼はニコル、ランスロ等の教師のもとに
専心勉強した。彼が細かに註をつけた聖書は今日も巴里圖書館で見ることが出来る。
彼等は同時に、拉典、希臘の文學を可成り深く究めることが出来た。

當時のポオル・ロワイヤルは、今日から見れば更に樹立の厚く茂つた森で取り圍ま
れ、今日よりも一層人里はなれた感じのする場所であつた。その森の奥に、今日は乾
きはてしまつたけれど、舊くから湛へた池があつた。若いラシイヌはこの水際へ來
て、樹々の倒影を眺め、銀色の魚の跳るのを眺め、さらに燕がその水面を掠めて飛び、
多くの小鳥がその水際で、群れつ、離れつ、羽叩きしては、水を浴びてゐるのを眺め
た。彼の詩才は、まづこの水際で目醒めた。彼は此處で幾つかの小さな詩を作つた。
岸邊の草の赤い花影が水に映るのを、折れ曲むやうに水面に向ふ蘆の投影を、眠る水
が思ひを浮ばせるのだと思ひ、樹々のひたす緑の影の中を泳ぐ魚類を見て、水にはる

れど、森のなかをさまよふと思はるゝといふやうな詩想が、あまりありふれたものだといつて、この悲劇詩人の少年時の詩を非難しても仕方がない。これは、いまだ眞の抒情詩が目醒めない十七世紀にあつては止むを得ないことであり、如何なる力よりも、時代の感化力が最も多く人を作つてゆく一實例と見るがよろしい。

またこの森の中に於てこそ、若きラシイヌは、その友達のヴランクールと共にソフォクルに、ユーリピイドに読み耽つたのであつた。彼の驚く可き記憶力は、そのなかの好きな個處をば盡く語記させた。

彼はまた偶然、「テアジューヌとカリクレエ」といふギリシヤの戀物語を發見して、それを耽讀した。この戀物語の中にてこそはラシイヌは、後年彼の傑作となつた「フェドル」の恐ろしい物語を知つたのであり、祖母と、叔母とよりほかの女性を知らなかつた少年は初めて、美しいカリクレエに異性の情を見たのであつた。「この美しい、若い娘

は、少年を抱きかゝへ、泣きつ、口づけしつ、その外套をぬぐひつ、やがて溜息をはじめた」。小暗い森の中で、若いラシイヌは、初めてこの熱情に燃ゆる少女に打當つた。彼は人目をさけてこれに読み耽つてゐたが、つひに、教監のランスロに發見せられ、その書物は取り上げられ、火に投ぜられてしまつた。けれど、直ぐまた同じ書物を手に入れる工夫が講ぜられた。そして今度はすっかり語記してしまつてから、彼は同じ教監のところへその書物を持つて行つて、言つた。「これもほかのと同じやうに焼く下やう。」

彼はギリシヤの物は多く読み、多く翻譯し、多くの註解を加へた。「彼は、ギリシヤ文學の殆ど全體に亘つて、そして拉典文學の大部分に亘つて、屢々、ページよりページへ釋解を付ける異常な仕事を初めた」と、ジュール・ルメールはその「ラシイヌ評傳」で言つてゐる。

千六百五十八年、青年期に達した彼が此地を去つた時、後の悲劇作家の素質は十分養はれてゐたのであつた。

「我々の國語に於て、我々の持つ最も完全な史片」とボアロオの批評した、ラシイヌの「ボオル・ロワイヤル概史」は一體、何時書かれたのであらう。學者の間に様々に論ぜられてゐる。が、少くも彼の晩年、「エステル」、「アタリ」の書かれた前後であらう。彼がボアロオと共に、ルイ十四世のもとに史官として仕へてゐた間であるに異ひない。この手記のあつたことは、彼の二人の子供すら知らなかつた。王の目には勿論、觸れしめる可きではなかつた。

パスカルの生前から既に加へられてゐた王宮及び一般教徒からのボオル・ロワイヤルへの壓迫は、年々烈しくなつて來てゐた。追放、投獄、學校の閉鎖がやがて命ぜられた。修道院の女性等も四方へ散亂せしめられた。遂には、大アルノオもボオル・ロワ

イヤルを捨て、北方へ身をもつて脱れずにはゐられなくなつた。殊に自分の絶對權を信じてゐたルイ十四世にあつては、己れの命に従はない教徒に對する憎惡の念は甚だしいものであつた。その王の眼の下で、ひそかに、昔自分を育てゝくれたポール・ロワイヤルの歴史を書いてゐたラシイヌの心持は、親友のボアロオのみが理解してゐたのであつた。

ラシイヌにあつては、その悲劇の天才が閃いたのは、清純なる教徒の一生に於ける一事變の如きものであると言はれてゐるが、彼の六十年の生涯の中、その少年時と晩年とは全き純なる教徒の生活であり、彼が「テバイド」を書いた三十五歳の年から、「フェドル」を書いた四十八歳に到る壯年期は、純文藝の時代であつた、彼の一生は宗教の宏くして堅き基礎の上に、美の殿堂を築き上げたのであつた。この神祕の基礎と、美の堂宇とを通ぜしめる戸口として、一方に「エステル」と「アタリ」とがあり、他方に、

この「ボオル・ロワイヤルの概史」がある。

彼はボオル・ロワイヤルの盛時を見た。その盛時の歴史に自分の一生の大切な時期を織り込んだ。彼はまたその自分の歴史が織られてゐる聖地の荒らされるのも見た。彼は衷心からその聖地の歴史を書きたい要求に驅られた。彼は、その晩年に於ては、壯年の文才の發揮をば、罪を犯してもしたものゝ如き心持ちで、眺めやつたとさへ言はれてゐる。従つて、彼がこの「概史」を書く時の心持は、全く敬虔な教徒の心事であつた。そして、彼は自分の遺言によつて、自分の心の生ひ立つた土地、自分を心から愛し育てゝくれた人、ボオル・ロワイヤルに於けるアモン教父の墓の側に、自分の遺骸を横たへることを願つて、さうせられた。

我々が今日ボオル・ロワイヤルで見るとは、僧院の一部に残る禮拜堂であり、その禮拜堂に遠くない處にあるラシイヌの墓であり、そしてその禮拜堂のなかにある、パ

スカルの死の面である。次第次第に破壊を重ねて、千七百年に最後の撤廢が命ぜられてしまつたこのボオル・ロワイヤルは、しかし、パスカルの中に、ラシイヌの中に、永久生きてゐると言ふべきであらう。ボオル・ロワイヤルの歴史を知るためには、何人も知つてゐるサエント・ブウヴの「ボオル・ロワイヤル」がある。けれど、今日、それについての質問を發するならば、有ゆる學者は口をそろへて斯ういふ。「サエント・ブウヴの「ボオル・ロワイヤル」を讀め、だが、特に、ラシイヌの「概史」を讀め」と。

我々が、この禮拜堂の中で、パスカルの死面の版畫と、繪端書と、そして、このラシイヌの概史とを記念に買ひ求めて出て來た時、午日の光は僧院の取り去られた跡の鋪石の上へマロニエの若葉の影を投じ、涼しい光ある風が、四周の丘から軽く吹き落ちて來た。この谿谷へおりて來て、僧院の跡を、案内者と共に禮拜堂へはいつてゐる

間は、何事か黙想でもするやうに、口をつぐんだまゝでゐた同行のモレアは、この風を眞正面に受けると、歴史の空気を吸ひでもするやうに、太い呼吸をして、私を顧みて微笑した。

彼は自由思想家ではあるが、カトリックの壯美にはいつも少からず心を動かされてゐた。パスカルの死の假面がこのベルジックの若い詩人に何かを感じしめたのかも知れない。併し私は、詩人の心理に立ち入ることの無遠慮は當然避く可きだと思つた。何人でも、或る場合に受ける深い印象を、傍の人の言葉でかき亂されるは厭はしいものである。その印象が心にしみて、芽を伸ばし、やがて發生するためには、それを黙つて大切に心の内に秘めておかねばならない。何事を見ても、聞いても、すぐその感じを口に出して、喋り出さずにはゐられないのは、アメリカ人の旅行者かなにかのすることである。

ラシイヌの居た校舎は、更に森の中の丘の方に立つてゐたとの事を案内者は告げた。我々はその方まで巡る時間がないので、もと来た途の方へ引き返して來ると、樹立の下の途を、賑かに喋りながらおりて來る一群の若い人々に出逢つた。日曜日のことゝとて、巴里の或るパンションにでもゐる連中であらう、教師らしい人が先きに立つて、何かと説明しながら、今まで我々のゐた方へ、すれ違つて下つて行つた。

草深い小徑と、樹立の中とを出抜けて、以前の白い大道まで來ると、我々を乗せて來た車の馬は、側の木に繋がれて、小さな御者は何處へ行つたのか姿もなかつた。「エイ」とモレアが大きな聲をたてゝ三度呼んだ。すると傍の草のなから「オム」といふ返辭と共に出て來た。

「眠つてゐたな」と、笑ひながらいふと、その子も笑つて、首肯して見せた。そして、もう直ぐ引き返すのかと訊くので、晝飯をたべる處が、何處かにあるかといふと、丘

の下の方を指して、彼處には小さなレストランが在るといふので、其處まで馬車で走らせた。

その飲屋の少し先きの方から、路は右と左とへ分れて、左へ行けばポオル・ロワイヤルの裏の方の森へ出られるし、右へ行けば、異つた路を通つてシュヴルウズへ歸られるとのことであつた。そして、その飲屋の傍に、今しがた行違つた人々が巴里から乗つて來た二臺の大型の自動車があり据ゑてあつた。

食後、森の中へ、少し許り入つて見た。此處は不思議に赤松の多い森であつた。佛蘭西の如き潤葉樹林の多い國で、松の林を見ることは、不思議でもあり、また寂しく、寧ろ恐ろしくもあつた。これがまだ舊時のポオル・ロワイヤルをして何處よりも一層寂しい感じを持たしめたのかも知れない。ことにヴェルサイユより來る路は、この森と緩い谿谷とに近づくにつれて、一層荒寥の感じを呈してゐたとのことである。この松の

林とジャンセニストの關係を、私は少からず面白いと思つた。

我々の小さな馬車が、また、麥の廣野と、若葉の林と、小村との間を走つて、シュヴルウズの停車場まで來た時は、午後四時頃でもあつたらうか。巴里への汽車の一室に向ひ合つて腰を卸ろした時、暫くとちてゐたモレアの口は、またいつもの雄辯を回復して、巴里のなかのルクサンブールの停車場へつくまで、殆んどとめどなく喋りつけてゐた。

夏休み

草原と、小さな谿とをへだて、針葉樹林のけはしい暗い山に向つて、私の借りてゐた部屋の窓は明いてゐた。その谿の中を流るゝ川の音が、天候にしたがつて高く低く聞えて來た。その草原の端に沿うて白い路が、も一つの同じ杉山の下を、谿の方へ導いて、その谿の眞上に立つてゐる農家の前で折れ曲つて、向うの方へ消えてゐた。

四五日前の夕方、私は、レマン湖の岸から、トノンの市から、旅行者用の自動車で、ラ・ドランスの谿谷を五六時間この谿の入口まで揺られて來たのであつた。

オート・サヴォア的首都、トノンはレマン湖の岸の温泉地である。そして湖水をへだてた對岸はスキスのロオザヌの市街で、夜間は、その市の火光の輝くのが見える。

佛蘭西人の多くはジュネエヴのこの湖水が自國のものだと思つてゐる。事實はその湖水の中央に國境線が縦に走つてゐるのであらう。けれど、それほどトノンからの湖水の眺めは全景を支配してゐるのである。けれど、戦争はまたこの自由な無じるしの國境に限界を置いてしまつた。ジュネエヴからこの湖水の奥のモントルウへ行く汽船は、強ひて佛蘭西の岸へ寄るのを避けて、手のとくばかりの處を、岸から船を呼んでも、船から降りることを求めても、平然として通りすぎてしまふ。私は一度びジュネエヴへ足を入れたゝめに、トノンへ出る爲に更に大迂廻をしなければならなかつた。

歐羅巴に於ては、温泉地の設備が整つてゐればゐるほど其處に止まつてゐる氣にはなれない。佛蘭西の温泉地の最も大きなエッキス・レバンでも、まだこのトノンの温泉地でもさうである。設備があまりに科學的である。人々は全く孤獨を強ひられる。でなければ全くの游泳をしなければならぬ。湯げたに頸をのせて、湯のこぼれるのを、

溪流のひどくのを、ちつと靜かに聽き入つてゐるやうな自然の生活はゆるされない。浴衣はあつても、そのまゝ外出は出来ない。カラをつけて、ネクタイをつけて、靴をはいて浴室から出なければならない。恐らく、温泉の設備だけは、歐羅巴人にとつても、日本人にとつてもお互に忍び難い組織であり、味い難ひ興趣であらう。入浴の習慣の相異が兩者を引き離してゐることは遠い。クロド・ファレルの「戦争」^{ラ・タイユ}といふ作は、日本のことを書いたロテイ以後の作物である。あの中に佛蘭西の畫家が、長崎の近郊で、或る旅宿に泊つて入浴すると、女中が二人ばかり浴室へやつて来て背中を流すことがいかにも意外な驚く可き事のやうに書いてある。それは佛蘭西人にとつては、浴室へ、しかも女性がはいつて來ることは驚く可き事に異ひない。そして日本の女中等にとつては、其眞白い皮膚か、また駭く可きものゝやうで、それがほんとの生きた人間の皮膚であるかどうかとおそろく手を觸れて見るのが、いかにも印象風に書いてあつ

たことを思ひ出す。或は入浴の習慣を根本にかへることの困難は、皮膚の色をお互にかへることのむづかしいのと同じかも知れない。

トノンからの自動車は、旅客と荷物とで身動きもならないのを、皆靜かに、如何にも旅馴れた風に、互に身を小さくしてゐた。十歳以下の子供も二三人乗つてゐたが、五六時間の旅を、ほとんど不平一ついふでもなく、いかにもおとなしくしてゐた。舊時の粗末な挽き馬車が旅客馬車に代り、それがまた自動車にかはつて來たといふまでのことで、その乗り手にとつては、同じ旅より旅への生活でもしてゐるやうであつた。恐らく今日のジプシイの群が、思ひ立つては、何ものもとどめることの出来ない漂泊の旅へ、車のついた小箱の家を馬に挽かせてさまよひ出で、北はフィンランドの沼地から、南はジブラルタルの岬角まで、水草を追ふ生活をしてゐるやうに、彼等の祖先は或は北方からの蠻族に、或は南方からのローマ人に追はれて逃げまはつたことであらう。こ

の遺傳的習癖が彼等を旅馴れさせてゐることは、到底日本人なぞが普通考へてゐる以上である。民族移動の烈しかつた國の人々と、定着の生活者との間の習慣の相異は、乗合馬車の中にも、汽車の中にも、更に市街地の電車内にも現はれてゐるのであらう。

ラ・ドランスの谿谷は、木曾の谿谷を舊時乗合馬車で通つて行つた記憶を思ひ出させるやうな、兩岸の山の迫つた、樹々の繁茂した、流れの急な、空の高い、空氣の澄んだ、即ち新鮮そのものゝなかへずん／＼はいつて行くやうな、奥深い谷間であつた。この谿は北サボアを殆ど貫いて、モン・ブランの麓の方までも走つてゐた。

寂しい、人通りの少くなつた、劇場もほとんど鎖され、商家もしめられ、市街全體が夏休み中の學校の庭やうになつた巴里から出て來たものには、すべてが爽かで、自分等の目も耳もはつきりして、心の澄み渡るのを覺えた。

谿が少し開けて、川の兩岸が高臺のやうに草原をつらね、杉林と接続してゐるあた

りに、幾つかの小部落の木製の農家が見え出して來た。自動車は、ドランスへ流れ込むも一つの溪流の口もとへ私と、私の旅行カバンとを卸ろして、橋を渡つて、眞白い路の上を、さらに谿の奥へ走つていつてしまつた。

山巔にかくれた日は、まだ向ふ側の草原の上に、澄みきつた水のやうな光を投じ、それが次第に高まつてゐる杉林の頂きを滑つて、峰の方へとのぼつて行く。夕方近き谿合はしづまりかへつて、緑が黒味を帯び、溪流が音高く鳴り、人家は遠くに見えてゐても、人影はなく、全く見知らぬ國へ來た一人の旅人の前へ、サボアの谿谷は鮮かな姿を浮ばせてゐた。

不意に、私の頭の上の方で、人聲がしだした。見上げると、溪川に沿うた、草深い坂の小徑を、三四人の白衣の姿が見えだした。

「あゝ、ムッシュユウ・ヨシエ！」さう聲を上げながら、眞先きのジャンが、草の小徑をま

ろぶやうに駈けおりて來た。「もう自動車が來てしまつたの。」

「だから、僕が此處にゐるのです。」

私は笑ひながら應じた。

直ぐ私の前へ、金髪の、眼の大きな、寧ろ瘦せ形の、二十四五の青年が、微笑しながら手をさしのべてゐた。

「昨日の夕方も、皆して迎ひに、此處まで來たが、君は來られなかつた。今日は自動車、三十分はたしかに早く來た。それで君を迷兒にしてしまつた。」

母親と、マリイとマルグリットの二人の姉妹が、あとから坂をおりて來た。

「御覽なさい我々の迷兒さん」とジャンは、皆の方を見ていつた。

「御覽なさい、今日私達が遅れてしまつて」と、母親は、三人の子供と共に私を取りまきながら、にこやかに言つた。

三人の子供のある家庭は、現在の佛蘭西では、「多數者の家族」の一つであつた。一番年下のマルグリットが生れて間もなく父親が死んだ後は、この三人は母親の手一つで育てられたのであつた。古風の修道院の教育を受けたこの母親は、自國の古典の修養と歴史とは可成り深い修養を持つてゐた。ことに彼女が少女時代を送つた千八百八十年頃は一般に文法が厳しく教へられたので、ソルボンヌの理科を卒業したジャンも、また現に哲學科の學生であるマリイも、何か論文でも書く場合は、いつも母親の指導を仰いでゐた。

「マ、ンは一生でも我々の先生なんだ」と、ジャンはいつか笑ひながら言つてゐた。「あれで、マ、ンは若い頃は随分コケットだつたんだ」と、マリイが何かの拍子にこつそり言つたことがあつた。

長男のジャンがより多くこの母親に似てゐた。頭髮でも、身のこなしでも、言葉つき

でも、すつきりしてゐて、ブルトンでも思はせるやうであつた。マリイは寧ろがつしりした體つきで、頭髮もむしろ栗色に近かつた。父親の面影でもあらうか。そしてこの娘が最も好く議論をした。何故日本には從來特殊な科學の發達がなかつたらうかと疑問を出すのはジャンであり、日本に哲學が獨立した學問になつてゐなかつたのは、佛敎がその代りをしてゐたゝめであると結論をつけるのがマリイであつた。

マリイによればソルボンヌの學生等は、佛蘭西の現在社會の縮圖のやうであつた。ここには極端なラディカリストもゐた。彼等は戰爭中、何回となく拘束せられた。こゝにはブルジョワの子弟もゐた。またコントの科學的宗教の儀式に列するものがゐた。一方に極端なロワイヤリスもゐた。レオン・ド・オデの崇拜者で、その選擇に騒ぎまはつたものもゐた。また有ゆる外國人が種々な考へをもつて集つて來てゐた。學生等の間では、機智に富んだ歌をつくつて、教授等の特徴をはやし立てた。

一番年下のマルグリットは一年間英國の家庭へやられて、家庭教師として子供の世話をしてゐたのであつた。母親はこの娘を最も多く愛してゐた。彼女は何人よりも家庭的で、何人よりも多く母親の手助けをし、日曜日の朝は、必ず母親と二人で拜禮に行つた。彼女は何人よりも身體が丈夫で、英國で送つた夏の間は、その家の子供等と共にスコットランドの湖水の岸で、十月末までテント生活をしてゐた。「マルグリットは生れつきアングロ・サクソンだ」とジャンはいつた。彼女は他の人々のやうに、食卓でも喋らなかつた。食事後、皆なして食卓を片づけてから、我々は讀書にかゝつたが、まだ人々が話しつゞけてゐる間にも、編物の手を動かしはじめるのはマルグリットであつた。彼女は夏休み中に、冬の厚毛の襯衣を編み上げるのだといつてゐた。一度も編物を手にしたことのないのはマリイであつた。

ジャンと私とが二人して私の旅カバンを持つて、皆して、草の小徑を、谿の中から、

草原の高臺へ出た時、眼の前の杉林の裾を、二人の婦人が私達の方へ歩み寄つて來た。一人は小がたな老婦人で、一人は神經質らしい眼鏡を掛けたその娘らしい女性であつた。

母親が、私をその人達の前へ紹介した。二人とも音楽者で、殊に娘の方は、ピアノストとして、戦争前は、獨逸國の演奏會にも出演して、多少の名声を博し、母子二人で歐羅巴の國々を殆ど盡く旅行して歩かない國はないくらいであると、マリイが後で話して聽かせた。

今は、この娘の方のマダムアゼル・ジェルヴェは或る自傳的小説を書いてゐるが、二三年來神經が昂つて來て、睡眠が出来ないので、夏は毎年この山中へ來ることにしてゐるのであつた。この老嬢は、劇作家で評論家で、ギュスクアヴ・エレヴェと共にデモクラシイ・ヌウヴェル紙を發行してゐたイアサン・トワゾオの親友で、いつも長い手紙を交

換してゐた。この評論家は、マダムアゼル・ジェルヴェとは長い以前からの文通上の知己であつたが、久しい間、それが眞の女性であるとは知らなかつた。それほど彼女は何事につけはつきりした物言ひをした。そしてこの女性が永久の老嬢であるのは、實はこの評論家に對する愛情のためであるのだとまたマリイが附け加へて話した。

「現代佛蘭西の劇作家のアントロジイ」の中にイアサン・トワゾオの名前を見る人は、彼の作品のことも多少承知せられてゐることと思ふ。私がこの人をマダムアゼル・ジェルヴェの紹介で巴里のリュ・ドゥ・セブルの舊い寺院を住家に直した家へ訪問したのは、その年の秋であつた。晝間は忙しいので夜來てくれとのことで、夕食後訪問すると、もう室衣ビシヤウに着更へたこの評論家は、薄暗い、舊い書物で一ぱいになつてゐる部屋の中へ、蠟燭をともした燭臺を手にして私を導いた。

そして、腰を掛けないで、彼は口を開いて、

「さあ、ムッシュ・ヨシエ、何がおのぞみです。現在の佛蘭西の状態なら、何でもお尋ねなさい、何でもお答へしませう。そして、その後で日本人としてあなたの意見を知らうちやありませんか。」この調子で、喋りだした。政治の問題でも、経済でも、素養の深い新聞記者の明快な口調で、片はしから片づけて行つた。そして、千九百二十年の選挙では、一時保守的傾向が大勢を占めても、それは戦後の形勢で當然であるが、この次の選挙までには、見ておいでなさい、大勢は必ず全く逆の方へ流れて行くから、との結論であつた。私は、以前の劇作家であつたこの人に、現在の劇文學の批評を聞かうとした。

「いや、劇のことだけは訊かすにおいて下さい。十年來まったく知らないのだから」と。それでも彼は、フランソワ・ド・キユレルが二十五年來の努力を佛蘭西人がもつと早く認む可きであつたとか、戦争後、劇は一時頹廢の傾向をとりはしなからうかとか、話

してゐた。この人は千九百二十一年に死んでしまつた。

マダム・ジェルヴェが年々借りる家に、今年はジャンの一家が加はり、私の爲にもとくに一室とつておいてくれたのであつた。

私の到着した翌日は日曜日であつた。

朝早くから村々の寺の鐘が、遠く近く谿にひびき、峰に衍して、賑やかに聞こえた。

少くも三つ四つの鐘が鳴つてゐた。私達の家の前の路を、谿とは少し反對の方へ行つた處に、私達の村の會堂があつた。其處から響き出す鐘が基調となつて、遠くのが合奏をした。マダム・ジェルヴェは早速その鐘の音符を、私のために紙へとつてくれた。そして、なほ耳をすましながら、今、鐘樓守が一つ足を踏みたがへた、おそらくあの鐘の撞き手は老人だらう、鐘の音は熟してはゐるが、何となく弱々しいといつてゐた。

それから音楽者が気分によつて、その口々の演奏の音色の相異なぞを話した。また動物のなかで、自分の経験では、蜘蛛が最も音楽が好きだ。自分がピアノを弾いてゐる時、自分の室の天井から蜘蛛がピアノの上へ一線をひいておりて来る。かまはずに弾じつゞけてゐると、二三回空中を上つたり下りたりして、いかにも樂の音を樂んでゐるかと、思ふと、弾き終へて、自分が、どうするかと黙つて見てゐると、暫くうつとりしたやうにしてゐてから、また靜かに、天井へ上つてしまふ。最初は、偶然のことかと思つたが、幾度もその経験をしたので、この小動物の音楽好きなのが確められたと語つた。

「でも、蜘蛛が音楽に引きつけられるのか、人間の美に打たれるのか判りはしない」と、ジャンが笑ひながら口をいれた。

「それは大變だ、蜘蛛に愛されては耐らない」と、マダムアゼル・ジェルヴェがまぜつか

へした。

「おゝいやだ、蜘蛛の戀人！」マリイが聲を立てた。それで皆が笑ひ出してしまつた。午前中、私達の窓の下を、日曜日の着物を飾つた人々が賑かに通つた。マルグリットと母親とはいつものやうに會堂へ彌撒に出掛けた。ジャンもマリイも、ジェルヴェ母子もそれぐの室へ籠つてゐた。山中の日曜日の小村の草原には、柔かな緑の上へ日が射して、私の窓に向つた杉山の下の谿間には、まだ朝霧が消えやらす不思議な姿に懸つてゐた。何處からか山羊のいちぢれたやうな、老人の咳き拂のやうな鳴き聲が、時々聞えて來た。路を隔てた縦の林からおちて來る風は、皮膚の一々の目へ吹きいるやうな涼しさをもつて來た。

私はジェルヴェ母子の人達を見ると、ユング・フラウへ登る途中で出逢つて、一緒に登山電車で頂上まで行つた匈牙利の老音楽者のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。

今朝の食卓でその話をすると、ジュルヴェ夫人も無論その人の名前を知つてゐた。ヴィオロニストとしては有名な人であつた。その人は二人の青年をつれて来てゐた。故國を脱けだしてリュツツェルンへ来てゐた。そして當分國へは歸れまいとのことであつた。その人は私を見ると、直ぐ日本人だらうといつた。そして自分の國へどうか日本人が屢々来るやうにしたいものだといつた。自分等はずもと東洋人である。歐羅巴にゐることが一種の苦痛であるときへも言つた。私はその後この樂人の宿所を失つてしまつたことを非常に残念に思つてゐる。今でも時々その人を思ひ出すごとに、いつもユング・フラウの純白な山の頂が恐ろしく美しく眼前へ浮び上つて来る。その雪の上を二人の青年をつれた老音樂者の登つて行く姿が目に見える。彼はロマン・ロオランの友人でもあつた。

午後、私達は散歩に出掛けた。歩き好きのジャンはいつも眞先きに午後の散歩を主張

した。歩き好きな佛蘭西人のなかでもジャンは殊に歩くことが好きであつた。ジャンは、この樅の林の中の小徑を登つて行けば、必ず高い山の頂へ出る。其處には山上の牧人の部落がある。その名前は何とかいふのであると、彼はそこへ行く途筋まで近隣の人から確かめて来た。さらにその上へ出れば、草山になつてゐて、この草山の頂からは必ずモンブランが見えるはずだと主張した。

我々はジャンを先導としてこの樅林を登ることにした。ジュルヴェ夫人とマダムアゼルとは林の出抜けるところまで来て引き返した。林の間は、日影もさゝず、苔のむした地肌靴の下で柔かく、處々には岩角が表はれて登るには樂であつた。小徑はうねと曲つて我々を一時間あまりも土へ上へと導いて行つた。林を出抜けると果して草山になつてゐた。丸木を積んで作つた牧者の家が二三つ集つて立つてゐた。大きな圍ひをした中に牛が散つて草を喰んでゐた。

夏の間は、此處へ牛をつれて来て放つておくが、秋はみな麓へ連れおろして牧舎で冬籠りをさせるのであつた。牛の頸につるした鈴の音が、草の中から、ほのかにひびいて来た。

それから上は、草の中を、小徑の上を一意に登つて行くのであつた。直射する日光と、草いきれとが相當に暑くはあつたが、風は涼しく、草の上を柔かに吹いて、澄んだ大空の青い腹は、行く手の草とすれ／＼になつてゐた。

ジャンが眞先きに立つて、マリイとマルグリットと母親の順で、私は殿りとして登つて行つた。何でもこの途を奥まで行けば、スミスとの國境の木標が立つてゐるはずである。戦争中、國境の密輸入者は、その間道を越してスミスから煙草や、砂糖をもつて来たとのことであつた。皆の足はなかく早かつた。ジャンは時々草の中へ腰をおろして後から来るものをまつてゐた。最も遅れがちなのは私であつた。

不意にジャンが聲を擧げた。「そら、デジンモルテル！」彼は手に好きな植物を掴んでゐた。アルプ植物の一種で、いつまでたつても白い花の色の變らない、常操を象徴する草であつた。マリイとマルグリットとは争つて足許を探しはじめた。小流になつた、草と小砂との間に、その草が幾葉も生えてゐた。

それからしては、もう間もなかつた。果してジャンの主張した通り、北の方に當つて、連嶺の上に眞白な雪の峰が、大きくなはるやうに、天際に横はるのが目にはいつた。まさしくモンブランであつた。リヨンのフルヴィエールの丘の上から、遙かの空際に、雲のやうに浮んでゐたのを眺めたのはもう三年以前であつた。グルノーブルの奥の方に、シャンペレイからは更に近く、また、つい四五日前は、ジュネエブから眺めやつた山であつた。

ジャンは自分の豫言的中したのを悦ぶやうに、草の上へ腰を卸してぐつと眺め入

つてゐた。巨きく、高く、そして美しいこの山の面は、日に輝いて、白光を空に散してゐるやうである。

「美しき合調、氣高き調和、他に於ては晦暗なものが此處に於ては麗朗の中に浮ぶ。アルプは一つの光りである」とミシュレは、いつてゐる。ゴオティエはまたこのモン・ブランの美しさを説いてやまない一人である。「この調和ある氣高き形をした聖なる美神」と、如何なる場處で、また如何なる場合に於ても、思はず人々がこの姿を仰いだ時、人は嘆美の聲を立てずにはゐられないであらう。しかもこの永久處女の美神は、長く人間の嘆美の目から隠されてゐた。その姿が時に空際に浮んでも、連峰の上に立ち現はれても、人々は仰いで見る事を知らなかつた。突如として、我々の前へ山が昨日大地から湧出されでもしたやうに、人々が争つてそれに向ひだしてから百年になるかどうかである。ロマンティストの詩人らは、我々のためにこの新しき美を歐洲の天地へ出現

せしめたのであつた。

スタンダールは、この山の美を少年時から遠く仰いでゐた。彼にはベルドオヌの連嶺と、モン・ブランの遠望の美とは、如何にその地の人々をば嫌つてゐたにしても、終生捨てる事は出来なかつた。彼が初めて巴里へ出ての失望は、巴里に山のないといふことであつた。そして彼は、「若し巴里の周圍に近く、山嶺が横はつてゐたならば、たしかに佛蘭西の歴史は、佛蘭西の文學は、異つた局面を呈してゐたことであらう」といつてゐる。シャトウブリアンの「モン・ブランへの旅」以前には、殆どこの山は奥深く隠れて人に知られなかつた。十八世紀に於ては、人々は山岳に對して目をとちてゐた。ルウソオはまたこの方面に對しての眞の開拓者である。地上に大革命の波がうづまきかへると共に、人々は初めて目を開いて、仰いで空際に浮ぶ天然の美を認めることが出来たのであつた。自然の嘆賞もまた革命のたまものであつた。

日が傾ぶくにつれて、モンブランは色をかへて来た。白光がうす紅に、やがて紫がかつた紅色となつて来た。もう我々のゐる草山には全く日はさゝすなつて、冷たく澄んだ夕空が淡青に輝き出した。そして、遠くの方から、断續して来る牛の鈴の音が山中の夜の警告のやうに響きはじめた。

草原をおりて来る速力は非常に早かつた。私達は振りかへり、ふりかへり、この暮れ残る天際の紅色をしみながら林のところまで来た。

不意に、薄闇のかゝつて来る後方で、角笛の音がしだした。とりとめがたい、断續する、不思議な物の音である。暗いやうな、太い、悲しげな、傳説的な物の音である。

牧者等が、草の中へまぎれ入つた羊を呼ぶのであらう。いかにも中世紀を思はせる響きである。私達は暫く、林の入口で立ちどまつて、それに聞き入らずにはゐられなかつた。アルフレッド・ドゥヴィニイは、夕暮の森の中で、この牧人の笛をきくとき、ピレ

ネエ越えのシャルマーニユを思ひださずにはゐられなかつた。そしてデュランダールを振つて最後の奮闘をしたローランの角笛を思ひださずにはゐられなかつた。まつたく傳説の生きて来る物の音である。

縦の林をくだる時でも、この物の音はなほ後方に暫くひびいてゐた。森の中はまつたく暗かつた。此度も私が殿りをした。ジャンは先きに立つて、角笛のまねをしながら、下りて行つた。くだるにつれて闇は一層濃くなり、私達はどんどんその闇の底へ沈んで行くやうであつた。やがて、下の方からも薄明りが見えだして、ジャンの呼ぶ聲に應じて、二人の音楽者が聲をかけるのも聞こえるやうになつた。

午前中は、皆な時間をきめて讀書をすることにした。午後は三時頃から必ず散歩に出た。谿添をつたつて山中の湖の岸へ、或は谿の對岸の山へ、或はモルジヌの町へ、少くも一日に三四哩の散歩をしないことはなかつた。

幕方のアンヂェリュウスが谿々にひびきたすころ、空気がかげんでは、谿の向側の小村に鐘樓が手にとるごとく近く見え、その頂上の鶏の形すらはつきり目にうつることもあつた。時には、私の窓の前の杉山がおそろしいほどに近く迫つて、その黒い影が殺到して来るのではないかとさへ思はれた。

八月の中旬に來たときの暑さは、またゞく間に過ぎて、十月中旬、そろゞく出發の準備をするころは、最早山々には秋の霧がかゞり、近い山の頂きには、薄雪すら見えた。山からは昨日も、今日も牛の群れが鈴をならしておりて來た。短かい夏の自由さをもう彼等はをはつて、冬籠の獸舎へこめられねばならぬ時が來たのであつた。

十月下旬までとゞまつてゐるといふジェルヴェ夫人等を残して、私達がまた、ドランスの岸で自動車を待合はせてゐた日は、ことに寒さが俄かにまして、粉雪が風と共に吹きまくられた。この山間の小村、二度と來ることはなからうと思ふ旅人には、サボ

アの谿の秋の光景は一層胸にしむものであつた。

風に追はるゝやうにして、この谿を出た自動車がジュネヱヴ湖の岸へ來た時は、日はまだ暑いばかりに輝いて、湖上は波の微笑を満面に浮ばせてゐた。

アナトール・フランス

巴里のソルボンヌ大學の中庭へ、ソルボンヌ街の處からはいつて、左手へ、大講堂の裏手へ廣い廻廊を傳つて行く人は、その廻廊の壁上に、アンリイ・マルタンが點畫で描き出した林間逍遙の姿のアナトール・フランスを仰ぎ見ずにはゐられないであらう。

長い、稍々滑稽味を帯びた、パンの神のやうな顔と、野羊のやうな鬚と、ことに、悲しげな、そして人の胸を打つやうな光をたゞへた、「いつも正しさを求めてやまない眼」とは、永久に、この學園に集つて来る青年等に、自國人にも、外國人にも、何事かを暗示し、何事かを考へさせずにはおかないであらう。

「恐らく、佛蘭西の作家にして、ルナン以來、佛蘭西に於けるのみならず、國外に於ても、最大多數の人々に感動を與へた人であらう」と、ヴィクトル・ジロオ氏は言つてゐるが、如何なる日でも、ソルボンヌのこの廻廊に、この畫の前の腰掛けに、二三人の人がこれを眺めながら何事かを靜かに囁き交はしてゐるのを見ないことはない。

この老作家の巴里の住居たるボア・ドゥ・ブワロオニユの並木路ボア・ドゥ・ブワロオニユの家は、また有ゆる種類の人々の訪問の目的地であつた。この家の「圖書の市」ブワロオニユといはるゝ作家の書齋には、文學者も、藝術家も、政治家も、スペインの無政府主義者も、ロシアの虛無主義者も悦んで迎へられた。過去の美が、現在の歴史が、未來の希望が、この作家の本來の特色たる對話の精神のなかに浮び上がらせられて、流れ動いた。ボオル・グセルの集めた所謂「ラ・ヴィ・ラ・サイドのマティネ」、アナトール・フランスの對話集は最も興味ある書物である。

二つの世紀の變轉期の精神の權化たるレミイ・ドゥグルモンとの談話、高踏派ハムナシヤンの現存の詩人の一人たるアロウクウルとの對話、以前は劇作家で、後には「新らしきデモクラシー」の寄稿家となつたイアサント・ロワザンとの會話。ことにロワザンを個人的に知つてゐた私にとつては、その會話の中に兩者の面目が躍如たるを覺える。青年詩人と老作家との對話、ロシアの革命家との談論は更に面白い。ソシアリストの委員はこの老作家を訪問して、巴里からの衆議院議員の候補者に立つことを切願する。老作家はその好意は感謝するが、その任でないといつて辭して、故友ジャン・ジョレスを推稱し、従前の友人であつたブリアンを批評する。

この對話座談に於ては、敏快な心の働きと、光りと、透徹とを見する老作家も、多數の人々の前に立つては決して所謂雄辯ではない。ジョレスの太い嗚聲と、野性の力を見するやうな容貌とで痛烈な印象を人に與へたのに對しては、寧ろ臆病なくらゐで、

微細な言葉の選擇、その音樂美は、群集に對しては稍々精巧にすぎるやうに思はるゝかも知れないが、併し彼の講話の持つ力は、現はるゝ力、壓する方、統率する力ではなくとも、透徹する力、感入する力、やがて聴衆を引き入るゝ力である。

千八百九十九年以來、彼はジョレスと共に時々、所謂「民衆大學ユニヴァルシテ・ポピュレール」と呼ばれるプロレタリアの集會に臨んで講演した。「プロレタリアは、現在よりして、科學の研究を初め、思想の力強い武器を手に入るゝことの必要を覺つた」と彼はその一つの講演の中で言つてゐる。このプロレタリアの集會は「目醒め」と名づけられ、巴里の各區に、或は獨立に、或は聯合して設けられたのであつた。

千九百〇一年五月十二日、コミュニニストの印刷者等がつくつた會合「解放者レマンシヤトリス」の發開式で彼がなした講話の初頭に、彼は、

「僚友等よ、私は、私自身がほとんど諸君の一人であると言ひ得る。印刷工場は私に、

舊い懐しい記憶を呼び起させる。私の父は書籍商であつた。まだ少年の頃、私は印刷所へ原稿を持つて行かせられた。若い頃、私は書物を造ることに身を入れてゐた。私は校正刷を直してゐた。私は私自身の校正を見る前に、他の人々のものを訂正した。私は可成り好い校正係にはなれるであらう。若し私が最う少し年をとつて居なかつたならば、恐らく諸君と伍することが出来たであらう」と。

彼は、自身言ふ如く、千八百四十四年、セエヌ河岸の書籍商の子供として生れたのであつた。父親のノエル・ティボオはボカジュから出た人で、母親はベルジックの「死の都市」ブルジュ出の人であつた。父は書籍商ではあつたが、千八百三十年後の當時の書籍商は、革命についての記録を整理し、逸散した諸書を蒐集し、一種の歴史編纂者として働いてゐた。彼の父もそれであつた。そしてこの人自身がやはり詩人もあつた。

「十八世紀は、巴里のこの一隅に於て、(セエヌ河のマラクエ岸の上に於て、)書籍商の玻

璃窓に排列せられ、古書商人の箱にあふれてゐた。アナトール・フランスの少年時に此處を訪ねる者は、古籍涉獵者、學者、十八世紀の残存者、革命期の老人、第一帝政治下の人々であつた。彼等は古書を指先きでまさぐりながら、ゆる／＼と過去を語つた。少年アナトールはその話を耳にしながら、窓越しに目をやると、風にそよぐプラタマの枝の下を、ゆるやかに流るゝセエヌ河上を、小蒸汽が靜かに滑つて行つた。

「木曜日の四時、我々が學士會ラシステイテユを出た時、春の快活な太陽は河岸と、その石の貴き眼界とを照らしてゐた。空を流るゝ雲の片々は日中の光りに微笑の魅力ある動きを與へてゐた。この微笑は、悦んで、輝く幾多の帽子の上に、金色した頸窩の上に、婦人等の朗かな顔の上にとゞまつた。けれど、欄干に沿うて排列せられてゐる塵にまみれた書物の上を過ぐるときはからかひ顔になつた。おゝ、この微笑がいかに古書のみじめな荒廢のさまを皮肉に啓示することであらう。この微笑のなかにこそ自然の永久の若さ

が輝いてゐる。その時、文學者、俗人等の群が散りくゞになつて行くなかで、私はとりとめなき甘い夢想に耽つてゐた。私はこの河岸の上を通るごとに、かつて、悦びと悲しみとに充ちた心亂れを覚えなかつたよめしのないといふことを言ふのを許してもらひたい。何故ならば私は此處で生れ、私の少年時を此處ですごしたからである。

そして、その當時、此處で私が逢つた親しい人々は、今は永久に消え失せてしまつたからである」と、彼は、その四卷の文學評論集、「文學生活」の第一卷、「マラクエ岸にて」の中で言つてゐる(同書、百〇七頁)

プラタマヌの並樹の下、セエヌの岸上の古書籍の陳列の場處は、今日も楽しき遊歩場の一つであり、巴里の名所の一つである。河を隔て、右岸には、ルッブルの王宮は勿論、アナトール・フランスの少年時にはチュイルイの宮殿も見られた、アナトールの少年時を知つてゐた一人の古籍商は、對岸のこの王宮内に住むナポレオン三世を、何事

も脱れられない隣人の厳しい目をもつて、批判してゐた。彼の店は次第に小さくなり、河岸の上で次第に片端へ追はれた。けれど、彼は快い日に脊を曝らして、古書を賣るよりは寧ろ讀んでゐた。彼は藝術家であり、哲學者であつた。そして世態の變遷について斷えず批評を怠らなかつた。彼は當時の古籍商の生残つた一人であつた。彼はアナトル・フランスを見付けて近寄つて來た。「あなたはアカデミーへ行つて來たのですね。どうです若い人達はユゴオ氏のことを好く言つてゐましたか」。そして彼は眼をばちばちさせながら耳許へさゝやいた「少し煽動家ですね。ユゴオ氏は！」

これ等が當時の古籍商であつた。此處には、このマラクエ岸には、歴史が、批評が、古代美が、現在の政治が渦紋をまいて流れてゐた。これ等が少年アナトールをして第一に過去の研究に目を向けしめ、その中に美を求めしめ、やがて歴史家の逢着する懷疑と批評とに向はしめ、更に進んで現代文明の缺陷、社會組織の矛盾を摘出せしめず

には居られなくなつた文字通りの搖籃の地であつた。この中から、シルヴェストル・ポナルが、ジエローム・コワニャールが、ルシアン・ベルジュレが生れ出たのであつた。アナトール・フランスの學校生活はコレージュ・スタニスラでなされたのであつた。古代語の勉強には言ふまでもなく特に秀でゝゐた。エレニスムが彼の心を養ひ、何よりも大切な感化力をその上に及ぼしたことも言ふまでもないことである。十八世紀がまた彼の心を強くひきつけた。カトリシスムはその美をもつて彼の心を動かした。古聖者殉道者等の生活は、彼には興味深きものとして映じた。少年の頃、彼は聖シモン・ステイライトの眞似をして水溜のほとりに立ちつゞけた。衣物を裂き泥中をひきづりまわし聖ベネディクト・ラブルを氣取り、馬の毛を背後に垂らして苦行者を演じてゐた。けれど、毎週會堂で爲せられる告白は彼にとつて耐へられないものであつた。強ひられたる告白の苦しさは、彼を宗教の嫌惡に導いた。要するに宗教は美の一つの種類として

彼の同感を引いたのであつた。言ひ換へれば、人間味のある限り、それが一見奇矯に見えても宗教は美として彼に映じた。普通、彼に加へらるゝカトリックの偉大性を解しないといふ批評は寧ろ間違ひである。彼の四冊つゞきの「現代歴史ラスタブル・コンスタンティン」といふ物語を仔細に讀むが好い。鋭い皮肉と、微妙な同感とは、如何にその辯別を誤らないかを知るであらう。彼には信者の狂信はない。けれど純正な人間美に透徹する詩人の明察が常に彼の同感ある批評を導いてゐる。

「現在に於ける最も修養深き文學者の一人たる」彼を養成し、その本質を發揮せしむるためには、相當の長い時期がなければならなかつた。彼は學校生活を終つてから、多くの古書の編纂をし、その序を書いてゐた。メトオドを立てないこの種の研究はいたくも彼を悦ばせた。智識と美との國をさまよふ悦びが彼の意識を支配してゐた。第二帝政の最後の弔砲として、獨逸人等の砲聲が巴里に聞かるゝ千八百七十年に於ても、

彼はその砲聲を耳にしつゝ、カルメット共に平靜にヴィルジルを読んでゐた。

彼が文學者としての経路の第一歩はアルフレッド・ドゥヴィニイの研究發表に初まる。

ヴィニイの非宗教味と、アリストクラティックな孤獨性とは彼を悦ばせた。と同時に、ヴィニイは長く忘れてゐた後で、彼の研究の現はれた頃からまた復活した。即ちバルナシアンバルナシアンの詩人の群れはその先代の人々の中では獨りヴィニイを多く尊重した。アナトール・フランスの詩人としての経路は時代から言つても、素質から言つても、暫くはこのバルナシアンバルナシアンの群に籍を置くやうになされてゐたのが當然の順序であつた。かくして、彼の詩集「ボエム・ドレエ」は、「レノス・コランティエンヌ」はつくられたのであつた。

「十七歳の時、私は、或る日、アルカアド街の讀書室でアルフレッド・ドゥヴィニイを見た。私は決して、彼が猫眼石で留めた黒縞子の厚い襟飾をしてゐたことを、そして、その襟飾の上へ縁の圓い折襟をしてゐた事を忘れないであらう。彼は手に金頭カポのした

細い籐の杖を持つてゐた。私は非常に若かつたが、彼は老人とは見えなかつた（註、

これはヴィニイが死ぬ三年前、六十四歳の時、即ち千八百六十一年の事であればならぬ）。彼の顔はおだやかでやさしかつた。色は失せてゐたがなほよく梳くしつた、軽げな頭髪は、その圓やかな兩頬へ捲毛となつてかゝつてゐた。彼はしやんとした態度で、小またで歩き、低聲で物をいつた。私は、彼が返して行つた書物を恭々しい感じでページを繰つた。それはブテイト叢書ブテイト叢書の一冊「ノモテレ・レ・ウラヌ 谿間の思出」であつたと思ふ。私はその書物の中に葉が一つ忘れて入れてあるのを見付けた。それは細長い紙片で、その上には、セヴィニエ夫人の手蹟でも思はせるやうな、仲々したそして尖つたその人の大きな文字で、詩人が鉛筆で、たゞ一語、或る名前「Belléophon」と書いてあつた。神話の英雄か、歴史上の船か、この名前は何を示してゐたのか？ ヴィニイはこれを書きながら、肉體の偉力の限りに打當つたナポレオンのことを想つてゐたのか、それとも、「ベガア

ズに運ばれた不運の騎士は、希臘人が何といはうとも、我々が額に汗をし、咽喉を燃やし、足を血にして夢中になつて追掛けるシメエヌ、あの恐ろしい而して魅力ある怪物を殺しはしなかつた」と獨言でもしてゐたであらうか」(『エビキエール』、四百三十四頁、ペーシより百三十七頁、ペーシ)

彼の『アルフレッド・ドゥヴィニイ』は千八百六十八年に現はれた、ヴィニイの死後四年

この偶然の邂逅から七年の後である。それから物語としては、「ジヨカスト」及び「瘦せ猫」が千八百七十九年に出で、彼の初期の傑作、シルヴェストル・ボナルの罪」は千八百八十一年、彼の三十七歳の作、これがいはゞ出世作である。

非俗的な、超世間的な、何處か喪心したやうな、まことに實行的でない、獨身の考古學者シルヴェルトル・ボナルの生活をめぐつての様々な出来事が、殆ど逸話的に、編年史的に綴り合はされてゐる。表面は枯木のやうに見えてゐるこの考古學者も、併し、巴里人である。彼の内には、機智も、親切も、想像も、夢想も、渴望も、包まれてゐる。

る。これが彼の枯淡な生活、専門の追及の中に生氣を浮ばせる。廢墟に閃く美であり、荒廢を生かす人間味である。若しくは廢墟に於てのみ見らるゝ生氣であり、更に荒廢と表面見らるゝものゝ實は生きてゐる眞生命である。青年時に祕かに燃えて消えたと思つた愛の火は、その頽齡に於て、その燒痕を見出した。老考古學者は、遠い舊の愛人の孫娘が哀れた状態に生活してゐるのを救ひ出して、さて、その娘を結婚せしめようとするに當つて、如何にしてその嫁資を造る可きかに苦んだ。彼は自身が多年蒐集した書籍を賣るより他に途を知らなかつた。併しこれはまた彼としては耐へられないことであつた。その娘のものにと向けられた書籍の中から、一つ一つ祕かにまた抜き取らずにはゐられなかつた。これが老考古學者ボナル博士の犯さずにはゐられなかつた罪であつた。

好學と、情緒と、過去と、現在と、混淆し、融合し、理智と同感との行きめぐつた

新鮮味の豊かな作物である。

千八百八十五年に出た「我友の書」マイフレンドの書は、遙か後、千九百十四年に出た「ル・ブティ・ピエル」と共にその生ひ立ちの記、回想録と見る可きである。清澄したスタイル、機智と温情との溶解した閃き、秋空の持つ如き澄み切つた微笑、その爽かな微笑の光りが全篇に溢れてゐる。彼は、その「我友の書」のなかでいつてゐる。「私はいつも人生を傍観者として観るやうな傾向であつた。私は決して眞の観察者ではなかつた。何故ならば、観察者には、それを指導する一つのシステムがなければならぬ。私はそのシステムを持たない。観察者は視線を向けて行く。傍観者は眼の向ふまゝに委かせる。私は傍観者として生れた。そして、私は終生、この大都市の見物人たるこの特權を保留して行くことだらうと思ふ。この大都市は何事でもが樂まれ、またこの大都市は、野心の時代に於ても、小さい子供等の無私の好奇心を保護して呉れる。私が列した有ゆ

る見世物のなかで我を怠屈させた唯一つのは、人々が舞臺を見ながら芝居で見るそれである。これに反して實人生に於ける有ゆる表出は私を樂ませた」と。

彼は實際この大都市、歴史が現在の中に呼吸し、現在が刻々歴史に繰り込まれつゝ行く巴里の市が好きである。いや彼は、巴里と共に佛蘭西が好きで耐らない。彼の假名たるフランスといふ字もそこから來たとの事であるが、眞偽は知らない。ポオル・グセルは言ふ「彼はこの好きフランスフランスを敬虔的にも愛すればこそ、彼はその祖國に混入するために、この優しい假名を自分のためにつくつたのである」と。(「アナトール・フラン

ス彼の本名はジャック・アナトール・ティボオである。ある。)

そして、彼の上述の傍觀的態度、寧ろ消極的な、純理智的な、懷疑的なまでの態度が暫くつゞいて行つた。エルネスト・ルナンの勢力のあつた時代、彼はその時代の思想と空氣とに接すると同時に、更に、モンテニユの持つ如き態度で、過去の隠れたる人

生も、現前に展開する生活をも眺めやつてゐた。而してその態度からして彼の批評が、諷刺が、生れ、更にその態度が緊縮して来るにつれて、表面修飾の生活を破つて、本能的肉的生活にまでもその洞察の明は及ばずにはゐられなくなつた。パルナシアンはナチュラリストに開展し、それと共に彼の好古癖は、博識と唯美と皮肉との幾多の物語をつくらせた。

かくて、千八百九十年には、埃及初期のクリスト教時代の物語、女優「タイス」が現はれた。ナイル河畔に苦行をしてゐる聖者がその淫蕩な生活をしてゐる女優を救はんとして、却つてその異端の美に打たれ、やがて救はる可きはすの者が却つて救はずにはゐられなくなる。この物語はフロオベルの「聖アントワヌの誘惑」に後るゝこと十年、時代の推移と共に、一層深刻な人生批評をその中に見ずにはゐられない。やがて、十八世紀に題材をとつた「女王ベドオクの焼肉屋」が出で、千八百九十四年に「赤

い百合」が出版された。その間に「ジャン・セリヴィアンの願望」(千八百八十二年)が、「アヴェイユ」(千八百八十三年)が、「バルタザール」(千八百八十九年)が、「レトユイ・ドゥナクル」(千八百九十二年)が、「ジユロオム・エワニャール氏の思考」(千八百九十三年)が出た。またこの間に、彼が新聞「ル・タン」に連載してゐた文學評論が「文學生活」と題して四冊となつて出版せられた。これと、後に千九百十七年に出た「ル・ジエニイ・ラテン」とは共にアナトール・フランスの文藝評論集であり、特に前の四冊はブルユステイエと論戦して近代批評に一面目を開いた、批評史上特筆すべき書物である。

アナトール・フランスはいふ「世に客観批評なるものは有り得ないのは、客観藝術のないと同じことである。自分自身以外のものを自分等の作品の内に置くと自負してゐる有ゆる人々は最も虚偽的な哲學に欺かれてゐるのである。眞實なることは、人は決して自己自身から脱出しないことである。これは我々の大なる不幸の一つである。」

ブルヌヌティエルはいふ、「虚偽とや、若しその一つが有る可きものとすれば、それは、我々が我々自身から脱出し得ないなどといふことを信じまた教へることである。實際の場合には、その反対に、人生はその脱出を役立てゝゐるのである。そしてそれについての理由は、疑もなく、若し人々が、さうでない場合には社會もなければ、言語もなく、文學も、藝術もないであらうといふことを考へて見たならば、十分はつきりと解るであらう」と、さらに彼は附け加へる、「我々は人間である。……そして我々は、他の者の内に我々を探し、我々を再び見出し、我々を再認するために、我々自身から脱出すべく我々が持つ力によつて、特に人間である」と。

アナトオル・フランスはいふ、「脱出、それは言葉がすぎる。我々は洞窟のなかに居る。そして我々はその洞窟の幻影を見るのだ。これがなかつたら人生は餘りに悲しいものであらう。人生に魅力と價值との有るのは、我々のとち籠められてゐる四周の壁

上を過ぐる影像のあるためのみである。これ等の影像は我々に類似したものであり、我々はそれ等が通り過ぎるときに知らうと努め、時には愛さうと努める。事實、我々が世界を見るのは、我々の官覺を通じてのみである。この官覺は自分勝手にその世界を變形もし着色もする。そしてブルヌヌティエル氏はこの事は拒否しない。で、反対に、氏の客觀批評を確立するために認識のこれ等の條件に倚りかゝるのである」と。

「アナトオル・フランスの心理研究」を書いたソルボンヌ大學のミシヨ教授はこの論戦くらゐ當時の青年に興味を與へたものはなかつたと語つてゐたが、この明かに異ふ二つの態度が近代人の中の二大傾向であり、それからして二つの異つた思潮が流れ出るのである。

「赤い百合」^{リズ・カウゼ}、赤い百合は何の象徴であらう。

鐘の音は、歌ひつ祈りつするものゝ如く

感動せる中空にていふ、「御身のことほぐ、マリイよ」と。

處女は果樹園の林檎樹をおとづれて、

使者の來るのを見て身を戦かす、

使者は彼女に赤き百合花をさまく、

その香を吸へば、人はたゞちに死せんと願ふ如き百合花を。

テレエズ・マルテン・ベレム夫人はロベル・ル・メニールといふ情人を持つてゐた。二人は巴里の或るホテルで屢々會合した。或時少しの争ひから二人は氣まづく別れた。ロベルは前からの約束で狩獵仲間と共に田舎へ行つた。その間にテレエズは伊太利へ、フランスへ、英國の女詩人なる友達の呼ぶまゝに旅立つた。その旅先きへは彫刻家のドゥシャルトルが伴つて行つた。彼は或晩、アルノの河岸の夕暮に彼女に愛を強要した。彼女は前の情人があるので一時は拒んだが、遂に約せずにはゐられなくなつた。それか

から後、彼等の甘酔の戀の舞臺は古美術の累積してゐるフィレンツェの古都市である。その間に詩人ヴェルレーヌの描寫であるといはる「シウレット」といふ老詩人が巴里に於ける如く、また此處にも姿を現はす。彼は夜の闇の路を歩く娘達に怒みをかけ、また憐みを受ける生活をしてゐるが、時とすると、長い杖を手に、旅袋を脊にして、アシシの聖者の跡をたづねに巡禮の旅に登る。——突然、彼女の前の情人ロベルはフロランスへ姿を現はして、彼女に愛の復縁を迫るが、彼女はそれをいれない。けれど、この事がドゥシャルトルの心に一抹の曇を與へる。やがて、彼等は巴里へ返つて同じ關係をつゞけてゐた。場處は彫刻家のアトリエであり、郊外の好奇と古美術との堆積した舊い別荘である。その間に彼女の夫をめぐつて様々な政論が行はれ、議會の争が生じ、やがて、彼は閣員にも列するやうにもなつた。——テレエズは最早今の情人に對して、全く夢中になつてゐた。全く幸福であると思つた。けれど、その間にも以前のロベル

は屢々彼女に復縁を願つた。或晩オペラで、彼は戸口で彼女に自分の家へ来るやうに囁いた。その様子をドゥシャルトルは鋭く見とめた。彼女は身慄ひして立ちすくんだが、家へ歸つて気がつくくと、赤い百合花のしべが血のやうに胸を染めてゐた。——翌日、彫刻家のアトリエで、彼女は一切を打開けて、彼女にとつては現在は彼一人より人がなく、彼一人より世界がなく、生命がないことを語つたが、總ては無益である。女にとつては、嫉妬は自尊心を傷けられた恨み、及び相手の女性に對する競争心から来る。けれど、男には全き所有慾から来る。過去に於て彼女に情人があつたといふことすら、彼には耐へられない。

男の要求のエゴイスト、女の無智な快樂追求、それを寫すのにゾラの如き努めたる現實主義ではなく、モウパッサンの如き印象主義でもなく、澄みきつた心眼に映するまま、閃めく理智の照らし出すまゝ、如實の相を描き出して来る。掴み取り、占有せず

ばやまない男の情慾、所有慾と、子供が玩具を求むるやうに、殆ど無邪氣に、本能的に歡樂の對象を追うて行く女性とが、秋水のきらめきのやうな光りの中に浮び上る。それは哀憐の光りである。

この作はアナトール・フランスの情熱を取扱つた唯一の作物である。そして、彼の心理過程に於ける、或時期の姿を見せるものである。

千八百九十五年に出た、「エビキユールの園」は、作者の議論の要素、反省の結果、觀察の結晶、断片的回想を集めたもの、アナトール・フランスの縮圖である。この作者を知るためには最も手近な、最も興味多い著作である。

要するにこの頃までの彼の心理はいまだ消極的であつた。「タイス」に現はれたる皮肉諷刺でも、「ジェロオム・コワニヤール」に於ける偏見、迷信、權威に對する破壊でも、「赤い百合花」に見るその全破壊の廢墟の後に残る官覺を通じての唯一の歡樂美でも、

一種の懷疑の衣、悲愁の色に包まれてゐる。いまだ積極的な、理智的な勇氣、自由と正義とに對する熱愛、全的人間的同感にはなつてゐない。

二

併し、この消極的な懷疑的な心理がいつまでも持続せらるゝわけには行かなかつた。千八百九十八年のドレフィユス事件が當代の一般の人々を覺醒せしめたと同じく、この作者の心理の根柢をも揺り動かし、振ひ立たしめずには置かなかつた。この一事件が如何にフランス人なるものが全的に動く國民であるかを示すと共に、世紀の推移期に當つて、如何に當時のフランス人が駭然として目醒めたかを示す一現象である。所謂國民主義を主張する人々も、常に正義の味方をもつて任ずる人々も、共にその色彩をはつきりせずには居れなくなつた。ゾラをして多數者の味方としての戦士たらしめた

のも、ロマンロオランをしてその態度を定めしめたのも、更にアナトール・フランスをして單にその洞窟に映する影のみ眺めてゐずに、その理智性を積極的に動かしめずにはゐられなくなつたのもこの事件であつた。

純理智的な、公平無私な、澄み切つた鏡の如き心を持つた人は、常時に於ては消極的であるといはるゝものであるが、その心境の奥底を揺り動かさるゝ時は、宏い、明徹した光明を持つて、四邊を強く照し出さずには置かないのである。此時以來、アナトール・フランスの批評は、その諷刺皮肉は、的なき、風に散る、たゞ快き皮肉だけではなくなつた。現實を的として、集合生活の組織上の缺陷に、空虚なる權威に、教權に、肉迫せずにはゐられなくなつた。更に國際間の争ひに、戦争の批評に、殖民政策に、東西文明の融合に、世界平和に、その意見を、希望を、投げ掛けずにはゐられなくなつた。過去の中に歴史の内に隠れたる生活と、美と、本能慾とを求めてゐた人が、

現在に目醒めて、未來に足を踏み出さずにはゐられなくなつた。

この轉換期を劃する彼の作物は、四冊つゞきの「現代歴史」と呼ぶ物語である。第一卷「遊歩場の楡樹」には佛蘭西の田園生活の傳習迷信、教會の形式、無益なる論議に費さるゝ有様を叙し、二人の牧師と一人の教授、ベルジュレ氏とが中心の人物になつてゐる。第二卷「衣紋竹」にはベルジュレ教授一人が中心人物である。彼は拉典文學の助教授であり、寂しい生活をしてゐる。新たに結婚したが、その妻は彼を欺いた。それでも彼は怒りを正面に現はさないで、その衣紋竹を折つて窓から投じて纔に心を静めてゐる。遂に妻は去つて、この教授には新たな生活が初まる。第三卷「紫水晶の指環」には教會に對する烈しい皮肉が浴せてある。教會僧侶等の野心争闘、僧正選舉に對する陰謀奸策、滑稽と悲慘との状態を摘出し、傍證博引、嘲罵縦横である。この作こそはまさしく後の佛蘭西に於ける政教分離の誘因となつたのである。この卷に於て

ベルジュレ教授は、個人生活では妻に欺かれ、世上にはドレフス事件がその頂上に於て論議せられてゐる時であり、彼の心中にも深い覺醒が生じた。彼は最早單なる解剖的パラドックスばかりを口にしてはをれなくなつて、はつきりした意見を、この事件について述べるやうになつた。やがて彼は巴里大學の教授に任命せられた。第四卷「巴里に於けるベルジュレ氏」には、政治と軍事との論議が充ちてゐる。愛國者で、軍國主義者で、保守家で、地主たる男と、今ではドレフスの味方として、眞實と正義のために明確な意見をのべ、明かな位置を占めてゐるベルジュレ教授との對話はまさしく皮肉な光景である。地主は、口では愛國者である、軍國主義者でありながら、實は、自分の子供が年齢が来て三ヶ年の兵役に行かねばならぬ。それを脱れるためにはベルジュレ教授を頼んで、何かの學校の卒業の特權を得なければならぬ、所が、その伴は不幸にして何も出来ない。とうとう印度の或種族が話してゐて今では殆ど無くなりかゝつ

た言葉を勉強するといふ事になつた。ブルジョア心理への痛烈な皮肉である。これと對照せらるゝのは、ベルジュレ教授と労働者ルウバルとの對話である。ルウバルはソシアリストである。ベルジュレはいまだ外部からの同感者である。けれど次第々々に彼の思想は綿密になつて來た。眞智の勇氣はこの教授を立たしめた。最早好意ある同感者だけでは居れなくなつた。趣味と教養と靜寂との生活から出て、汗と塵との混する多數者の中へまじつて、その新福音を説かずにはゐられなくなつた。五十七歳に於けるベルジュレ教授の改宗出發、精神労働者と肉體労働者との結合、——千八百九十七年から千八百九十九年に亘つての作者アナトール・フランスその人の心理過程である。

ボナアル博士でも、ジェロオム・コアニヤールでも、ベルジュレ教授でも、いづれは作者その人の心相の具體化でないものはない。この意味で、作者の批評の態度はその作者としての態度と一致してゐるのを見る。そして、この四冊の著作は、現代佛蘭西の世

紀の推移期に於ける眞の歴史であると共に、作者その人の生きた心の歴史であり、その中には「我友の書」に於けるが如き回想の懐しさもあれば、人間味の溢れたエピソードがあり、それと同時に、眼前當面の社會問題、集合生活の問題が躍動してゐる。

彼がジョレスと共に一方には軍國主義者、主戰論者に對して烈しく戦ひ、他方には多數民衆と同じ精神に生きる文藝々術家との間の固き結束を計つて、労働者の中にはいつて講演をつゞけたのもこの頃である。彼のこれ等の講演は千九百六年に出た「ヴェルサイユより好き時代の方へ」へ集められてゐる。この間に彼はアカデミシアンにあげられたが、一度アリストクラシイに背を向けた彼は、そのレセプションの時より以外には殆ど列席したことがない。

それより後の彼の著作の主なるものは、「ピエル・ノジエル」、「クリオ」、「克蘭クヴィル」その他の幾多の短篇、巴里の女優の生活をかいた、「イストワル・コミック」、少年

等のために書いた物語集、千九百十二年に出た佛蘭西革命期の物語「神々レニイウ・ウ・ラッは渴く」
 「天使の反逆」(千九百十四年)、象徴諷刺で語られる現在までの歴史物語「ペンギン鳥の
 島」(千九百〇八年)、「白き石シユル・ラ・ニル・ラの上にて」(千九百〇五年)、その他宗教及び神學を取扱つ
 たものは、「聖者クレエールレニエ・ウ・レウ・セ・ト・ウ・ニルの井」、「教會と共和國」、及び「ジャンヌ・ダルク傳」などがあ
 る。この最後のものは、當時の人々の熱狂的崇信に對して、科學的なまた一方には極
 めて解剖的な態度をもつて、純理智的にこの聖女の傳を書いたのであつた。

この中から「白き石の上にて」を抜いて見よう。

五人の佛蘭西人が羅馬の廢墟の中を、五月の暮方散歩しながら、古代のフォロオムの
 遺跡に近く、過去の文明を、羅馬人の生活を、戰爭を論じ合つてゐたが、やがて、そ
 の中のニコル・ランジュリエは、夕燒空の下で、燕の群の飛ぶなかで、フォロオムの一隅
 で、皆に對して、彼が書いた「ガリオ」物語を読みかかせた。これは古代文明の物語で

あり批評である。背景と物語との一致はその批評に一層の効果を與へてゐる。それが
 終つて彼等は月光を浴びてゐるフォロオムを去つて、或る小さな喫茶店カレへはいつた。彼
 等は此處で、引きつゞいて文明と戰爭を論じ合ふ。時は丁度千九百〇五年、日露戰爭
 の最中である。ランジュリエはいふ「人間の社會生活の過去は我々に或部分しか知られ
 てゐないから、その過去の連續結果たる未來も全然は我々に判らない……けれど、
 例へば、勞働組織の形式の變化するのを觀察して見るに、奴隸制度が使用人制度に變
 じ、使用人制度が賃銀俵給制度に變つて來た。して見れば、我々は生産のまた他の新
 形式を豫見しなければならぬ……即ち我々は資本に代はるべき形式を求むるやうに
 なされてゐる。……今日の状態の必然の引續きとして、資本主義開展の當然の結果と
 して、いつかは共產主義が實現せらるゝことの覺悟がある可きである」。次いで彼はい
 ふ、近代文明なるものは、歐羅巴人が他の人種を壓倒し奪略したことを意味す、「我々

が野蠻と呼んでゐる人種等は、我々を知るのにたゞ我々の罪惡によつてのみである」。羅馬人の獲得した平和なるものは征服によつてである。確に世界の平和なるものはこれと同じ手段では得られない。なるほど、戦争なるものは今後ともあるであらう、けれど、國際的ソシアリズムの迅速なる發生は、早晚、有ゆる國々の住民の結合を確かなものにするに異ひないと思はるゝ。その時まさに、滿洲に、黃海に行はれてゐた日露の戦争が話題にのぼつた。ランジュリュは更に言ひ続ける。「この戦争は世界歴史にも大切な一つの時機を劃する。そして、その意味を理解するためには二百年前に溯らなければならない」。羅馬人にはこの東方人の存在は知られず、彼等は自分等が征服し得た泰平の天下以下に、平和の國はないと思つてゐた。併し一層舊い、一層廣い泰平の天地があつた。それは支那の平和である。この黄白の二大文明は久しく互に知られずにあつた。近代になつて知り合つて來てもそれは部分的である。そして歐米人は兎

角支那を一つの殖民地と見ようとしてゐる。然るに日本人は歐米人から資本主義と戦争とを教はつた。そして日本は次第に彼等に似たものになるので、彼等は恐れて黄禍などと呼ぼうとするが、「我々がさきに白禍をつくつたのだ。この白禍が黄禍をつくつたのだ」。この戦争で、ロシアはその無力と不秩序とを根柢から示し、日本は戦勝は得ても財源は枯渴せんとしてゐる。いまだ最後の勝利はいづれにあるか知らないが、「併し、若し日本が白人の眼に黄色人種を價値あるものたらしむるとすれば、それは人道上に非常な貢獻をすることであり、また日本は無意識の間、そして疑ひもなく、その願望に反して、世界の平和組織の準備をすることになるであらう」。その意味は、若し日本が支那を導き、支那人をして自覺を持たしめ、西方人に對して價値あるものたるを示し、その相互了解をもつて、世界平和に至る動機たらしむることであると。——彼等は更に黒人問題を論じ、殖民問題を論じ、「殖民政策こそは最近の野蠻の形式であ

る」。自己の生活風習を優れたものと考へ、これを文明と呼び、他を壓倒して行くことであり、この殖民地の衝突が屢々戦争を導き來る。要するに羅馬文明の遺風である。更に各國の文明を論じ、アメリカがロマ式ならんとするを評し、ルウズヴェルトがタイトリイヴを讀んだのは彼の不幸であると。「ロシアが現在日本海に於て、滿洲の咽喉に於て拂ひつゝある代價は、たゞにロシアの東方に於ける空虚な、亂暴な政策の代價ばかりでなく、歐洲全體の殖民政策の代金である」と。

要するに、「人間的最大價値は人間自身である。地球をして價値あるものたらしむるには、まづもつて人間を價値あるものたらしめねばならぬ。土地、鑛山、水、地球の有ゆる實質、有ゆる力を發掘利用するためには、人間、有ゆる人間、有ゆる人類でなければならぬ。地球の完全なる發掘利用は、白人、黄人、黒人の結合したる働きを要求する。」

彼等は更に平和について論じ、ロシアについて、獨逸について論じてゐたが、やがて、彼等の乞ひを入れて、その中の一人たるイポリット・デュフレヌヌはポケットから彼の書いた角の戸口バルトホルム・トルストイより、または、象牙の戸口バルトホルム・トルストイより「を出して、讀む。これは未來を豫想して描き出したる物語である。

嘗ては過去へ、十八世紀へ、古代へ、のみ向けられてゐた作者の眼は、眼前へ、當面へ、更に文明の赴く先きへ向けられずにはゐられなくなつた。考古家と豫言者の握手、更にその豫見し確知したるものを現實に具體せしむる實行家の参加、それが最近數年間に於けるアナトール・フランスの心理である。「學者、哲學者、詩人、批評家等の第一の務めは、今日に於ては、新しき解脱の方へ急走する人間の活演劇へ全く身をさしづることである」と、若き革命家アンリイ・バルビュスがその「齒間の短劍」の中で言つてゐる言葉は、この老詩人の胸へ我が意を得たものとして響くであらう。

千九百十四年の戦争は、この七十歳の老作家をして、如何に心を傷ましめたことであつたらう。彼は戦争を憎むあまり、非戦論を主張するだけでは手ぬるしとして、ペンを捨て、直接剣をとつてその戦争の根元に向はうとさへした。彼の戦争を憎むのは、トルストイの無抵抗主義とも異ふ。また戦争の屠殺虐殺の悲惨を嫌悪する故のみでもない。もつと廣く、戦争なる大過失が如何に人間性に惡を持ち來たすかを憎むのである。さればロマン・ロオランの如く、戦争を無智にして愚なる者の犯す罪として憎みはすれど、高くから見おろして、理想に終始してゐることはアナトール・フランスには出來ない。もつと身近にこの事象を観察して、それに對抗もし、その殲滅をも謀らずにはゐられない。彼がクラルテ運動に参加した心理の一端もそれによつて推察が出来る。なほ更に千九百二十年の春、労働者聯合運動のマニフェスタシオンの列の先頭にこの

老藝術家の赤衣の姿を見出したとて駭くには當らない。更に彼がノヴェル賞金を得てその金を直ちにロシヤへ送つたとて、これも彼としては極めて自然なことである。

七十年戦争の當時には、二十六歳の青年にして、獨逸軍の砲聲をきゝつゝ超然として古典藝術の美に耽酔してゐたその同じ人が、七十歳の高齡に於ては、同じ獨逸軍の砲彈の飛來する下に、活動の人として姿を現はした。時運の進展は、彼の一生を通じて、最も鮮明な印象足跡を刻み出してゐるのである。

若し彼が五十歳前後にして、不幸にしてその存在を停止したとしたならば、彼は十九世紀後半の、ことに世紀末の作家の一人として、耽美と好古の物語作家として、好奇者の嘆稱にのみ値ひしたのでもあらう。眞の藝術家の生命は無限に伸長する。自然が持つ創造の力は、この偉大な藝術家の生涯を通じて、年と共に、生と藝術との密接な關係を、一層切實に、一層具體的に示して來るのである。